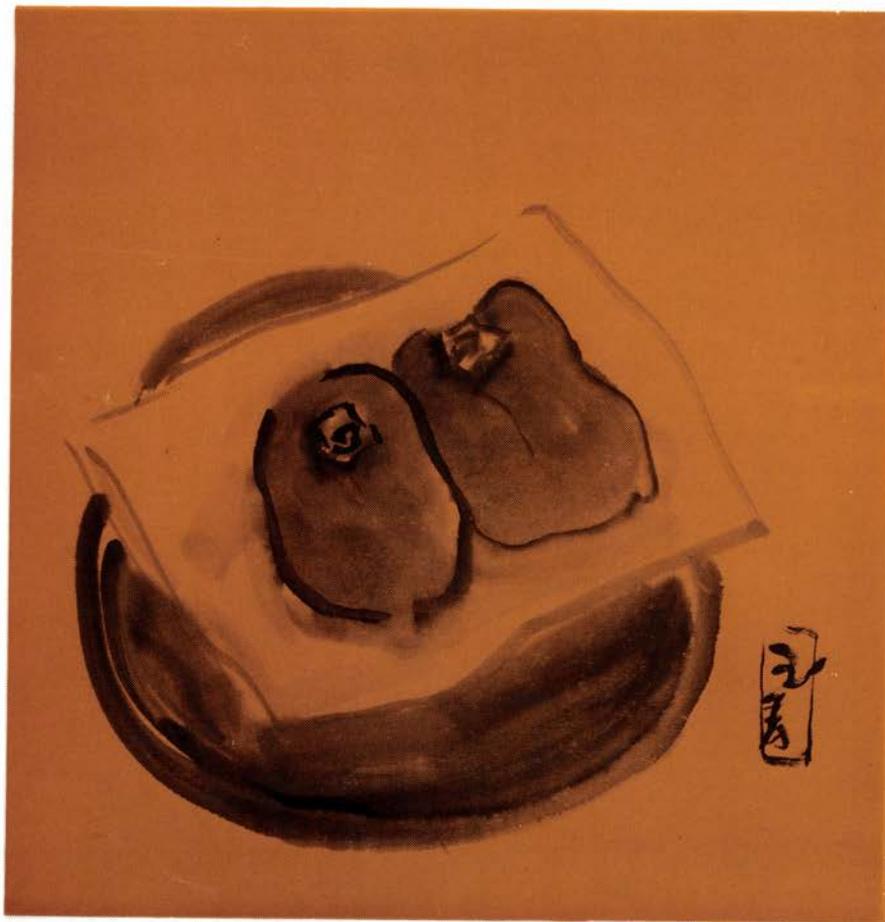


川柳塔

昭和五十六年九月二十五日発行
昭和五十六年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷六五三号



日川協加盟

No. 653

56年度二賞発表

十月号

オーエスケージェフ

熱い心を満たす

装うのはいいものだ、

思いのままに

気どったカッコウはきらいだ、



OSK JEFF
ORIGINAL DESIGN

株式会社 **オーエスケ**

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ



ぶたまん やきぎょうざ
豚饅・焼餃子
しゅうまい ちゃあしゅうまん
焼売・叉焼饅

大阪・なんば



TEL (641) 0551

《支店・出張店》

なんば高島屋 心斎橋そごう 梅田阪神百貨店 天満橋松坂屋
中之島サン・ストア なんば新川店・新川売店 ドーゾマ地下支店
ミナミ地下虹のまち鹿鳴 京阪ショッピングモール 淀屋橋サン・ストア
南海難波駅構内店 近鉄百貨店(アペノ店・上本町店・奈良店・東大阪店)

酒 仙 西 尾 栞

白玉の齒にしみとほる秋の夜の

酒はしづかにのむべかりける

余りにも人口に膾炙されている牧水の歌である。お酒のおいしい時候となった。

洋の東西を問わず、文人墨客には酒徒が多い。中国の昔の詩人、白楽天の酒は真に酒を愛し、大酒することなく、乱れることのなかった良い酒で、

林間に酒を煖めんと紅葉を焼きという境涯は絶妙である。

又、酒仙李白の一斗詩百篇に

長安市上酒家に眠る。天子呼び来れども
船上ならず、自ら称す臣は是れ酒中の仙
とうたっている。

李白の親友杜甫も酒は好きだったが、誠実な人間味に徹して、人間の社会苦、人間苦を悲壯にうたい上げている。

李白が笑い上戸なら、杜甫は泣き上戸の酒であった。

漢詩を己れの詩囊の糧としたといわれている芭蕉のもっとも影響を受けた詩人は杜甫であった。

詩人はさておき墨客はどうだ。

横山大観、並に下村観山画伯を忘れてはならない。大観は死ぬ寸前まで毎日一升酒を飲んでいたのは有名な話である。

観山は金に淡泊であった。面白い話に、金

閑寺の襖絵を描いた時もお礼など要らんというので、寺方では好きな酒を存分にふるまおうというので、池中に舟を浮べて大饗宴を催すことにした。飲むほどに、観山先生は大いに気分をよくし、舟中で立ち上って何やら踊り出したとたん、池中にもんどりうって落ちこんだ。接待の僧侶たちが立ち騒いでいるところへ、ひよっこり浮び上った先生は、ニッコリ笑って、又ブクブクと水の中へ沈まれた。助け出されてから

「先生！ 浮び上がった時、ニッコリお笑いになりましたが、どうしてあのような時に笑ったりなさったのですか」と一人の僧がきくと、「いやなに、どうせ死ぬんなら、悲しい顔なんかせず、笑顔で死んだ方が良いと思つて……」之には寺方一同大いに教えられたところがあつたという。

酒は量多きを以て快とするものではない。

「酒は食べ物の味を引ききたてるほどに飲むところに酒の価値があり、忘我の酔いを求めて飲む酒は下の酒である。」

酒はしづかにのむことにこそ。

鈴木村風子の句に

戦いすんで日が暮れて一本膳につき
というのがある。



座右の句

せめてもの拳は夢でふり上げる

(東洋樹)

私の句

高い空その高さまで旅に出む

辻 文平

川柳塔 十月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

酒仙	西尾 葉	(1)
すばらしき哉 人生の秋	若本多久志	(2)
川柳塔(同人吟)	西尾 葉	(4)
■川柳太平記(4) 情けない狂句の遊戯性	東野 大八	(24)
■連載 誹風柳多留廿六篇研究(三丁〜四丁)		(26)
56年度路郎賞・川柳塔賞決る		(28)
水煙抄	正本水客選	(34)
秀句鑑賞	同人吟	(34)
水煙抄	工藤 甲吉	(23)
愛染帖	傍島 静馬	(33)
カナダ・アメリカ飛び歩き	橘高薫風選	(44)
嗚呼 佐伯越子様	羽原 静歩	(47)
	林 瑞枝	(48)

すばらしき哉

人生の秋

若本多久志

あるドイツ人の老神父が「人生の秋とは何とすばらしいものでしょう」と語ったという上智大学・霜山教授のエッセイを読んだ記憶があるが、私はいま傘寿を前にしてこの言葉をしみじみと味わう幸せのひぐらしである。

サラリーマン時代「仕事気違い」と渾名をされたくらい働きながらも、正規の高学歴のないことへのコンプレックスが猛烈な読書癖となり、特に偉人の伝記や、訓話ものを乱読し、その万分の一でも実行することに努力した。

そして、三十六歳で小さな企業の経営者になった時、一応、生涯の計画を樹ててみた。その一つは、福沢諭吉七訓の始めに挙げられた「世の中で一番楽しく立派なことは一生涯を貫く仕事をもつことである」という訓えの実行であった。

その二は、具原益軒訓を守って八十歳まで生き、事業はどんなに未練があっても七十歳で後進に譲り、余生の十年間は、心・身・財や能力の範囲内で、人や社会のために報いる仕事を着々と進めること。

越子さん、それでも待っていて……………	八木千代……………	(48)
■句集拝見山内静水家族八人句集おかげさま……………	板尾岳人……………	(51)
「先手」……………	本多清人選……………	(52)
一路集「粗品」……………	川崎秋女選……………	(52)
「泡」……………	荻野鮫虎狼選……………	(53)
柳界展望……………	初歩教室……………	(50)
大萬川柳「ほどほど」……………	本田恵二郎……………	(54)
本社九月句会……………	川村好郎選……………	(56)
一分間の柳論……………	植村客遊子……………	(58)
各地柳壇へ佳句地10選・西岡洛醉選……………	編集後記……………	(62)
……………	薫風・酔々・鬼遊・史好……………	(69)

座右の句

仄の糸のばしてかぜに逆らわず

私の句

眠れぬ夜亡夫とも想う星仰ぐ

(茗人)

有田とし江



その三は、仕事の関係で取得した自動車運転免許を生かして、趣味のドライブ旅行で永年苦勞をかけた老妻への感謝を顕してやりたいということであった。

処がいま静かに顧みて、この生涯計画は偉そうに言えるほどの実行率ではなかったが、ほぼ半ばを越えている幸せである。

勿論、これは神仏の冥加によって、良き師先輩、友人、部下を得られた賜ものであり、更に言えば「明治生れの間人」であったのも一因であろう。

先日、毎日新聞の投書欄(読者の目)へも書いたが、我々の育った時代は偉人の遺訓や箴言でがんじがらめに締めつけられていたからでもある。

昭和五十九年から改刷される五千円札に登場される、新渡戸稲造先生の遺訓「一銭五厘の道徳」などもその一つで、四恩に報いる意味で一日一枚のハガキ(当時は一銭五厘だった)を、諸先輩、朋友などへ発信せよ。というので、私は二十年ほど前からこの実行を続けて来たのも一例である。

最後に、幕末の教育者として有名な佐藤一齋の遺訓を記してペンを措く。

「小にして学べば、則ち壯にして為すことあり。壯にして学べば、則ち老いて衰えず。老いて学べば、則ち死して朽ちず。」

幾山河越えてわが道悔いもなし(多久志)



西尾 栞選

岡山県 嘉 数 兆代賀

悪女になってうつぶん晴らしてみたい日も
老いの身の無聊へ猫が膝に来る
波紋信じて石はためらいなく沈む
ムキになる愚かな横顔だとおももつ
あきらめた心へ菊は白く咲く

青森市 工 藤 甲 吉

坐り込みついでに坐禅などいかが
人間の皮をかぶっている苦勞
火の中にひとしお赤い心の火
仁と義がバツタリ逢った梯子酒
婦省子に今日も西瓜が冷えている

鳥取市 小 林 由多香

平凡な石で蹴られた方へ向く
保護色に己の好みなどはない
正確に起こし目覚ましようとまれる

カラオケも揃え民宿負けていず
捨て石が無気味な力で待ちうける

兵庫県 遠 山 可 住

冷蔵庫に男一人をいたわられ
先頭を風除けにして自若たり
ふるさとの星が恋しい熱帯夜
勤の悪い蜘蛛で一夏棒に振り
特別の事情しどろもどろなり

尼崎市 黒 川 紫 香

社運隆隆仕事に飽いた社長さん
交番で叱る巡査の汗っかき
廃線になっても戻して呉れぬ土地
無精髭親父の顔が丸くなる

恋人の指から落ちぬ星の砂

高槻市 若 柳 潮 花

雷が去って鼓の音が冴える

お茶飲んで川の流れる街で待ち
騙すのは女騙されるのも女

またあした逢う約束へ夕焼ける
手を握るだけの若さは取っておく

竹原市 山内 静水

予備校の甥の盃持つつき
粗大ゴミになるまい六十路の習いごと
八月の雲が浮いてる日向水

戦友ひよいと貧しき金を持って去る
せめてもの別れ一指もふれていず

倉敷市 野田 素身郎

肺腫瘍手術

死亡記事がやたら目につく手術の日

手術後の点滴続く熱帯夜

肺切除泣くなお前のせいじゃない

肺切除無口を余計無口にし

肺切除もう煽てにはのれないぞ

鳥取市 河村 日満

暑い暑いのに甘えにグット生ビール

痛風に医学はうれし酒が飲め

友情は途切れず暑中見舞にも

墓洗う残りすくない気で洗う

崩さねば太子四五日居てくれ

大阪府 金井 文秋

親の敷くレールを毀したくて荒れ

瘦せる苦勞よりも食べたいものを食べ

意地一つ通してからの子が素直

てつせんが二度の勤めと秋を咲く

東大阪府 市場 没食子

振り出しへ素直に齡が戻れない

長生きで父母弟妹の忌も勤め

未だ腰に八十翁の万歩計

子の学資捻出型という家計

小半日口きかぬ日もあり老夫婦

今治市 長野 文庫

しゃんとした嫁で立場が逆になり

前例を二三調べておくゆとり

晴耕雨読蟬の国でも読書中

以下同文で済ませて欲しいおん祝辞

妙な世だ親の手伝いせずさせず

今治市 月原 宵明

財界をかつて背負った車椅子

熱帯夜間違ひ電話またかかる

マネキンの裸を抱いて秋に替え

仏より世間が怖い花をたて

底辺へ五色そうめん色を添え

新宮市 大矢 十郎

賃上げのない内職の灯が延びる
母も娘も自分の立場だけ喋り
良き候補天知る地知る人知らず

桜井市 岩本雀踊子

亡母の櫛愛しつづけた父が好き
感情線拳の中で狂い出す

妥協せず味方も持たぬ父の旗
親孝行したいが家が金持ちで
あれからの女が無口で酒呑みで

八尾市 高杉鬼遊

白桃をたまわる盆のあばら骨
相聞の血が流れあう昼下り
修羅を恋う二匹の鬼は弱虫で
葡萄園こどもは多いほうがよい
気紛れな釘師に運を狂わされ

松原市 谷垣史好

千発の花火を見てもふっ切れぬ
実力はそんなものかと鳥鳴く
人妻になっても君の稚い字
空罐を蹴とばし俺の夏終る
警報が遠く聞こえるわらび餅

八尾市 香川酔々

Uターンしてからははずむ鬼太鼓
駄菓子屋も休み迎え火焚いている
潮満ちて恋の炎の夜光虫

火の見櫓と役に立たないラッパ卒
草いきれ勲六等の御影石

倉敷市 水粉千翁

今日を知るきびしさにこそ花ひらく
腕組んで父は男になつて
紺飛白似合う女を捨て切れず
角砂糖とけゆく刻のしじまかな
待たされてよし夕顔はほころびぬ

岸和田市 高橋操子

造花ではなかつた花の芳香よ
奥さまも読めるハガキに二枚書く
御身ぬぐい大仏様のお手に乗る
夏なればこそツチノコの出る話
世代のずれだなんてあきらめられぬ古い

島根県 小砂白汀

さわやかに訣れて虹が濃ゆくなる
インタビュ―地元は嘘も知っている
一步出るそこに踏絵が伏せてある
不渡りをつかまされたような位置
唸らせるほどの日記を遺したし

島根県 西村早苗

まだ気持ちつかめぬ秋がもうそこに
蜂蜜と梅酒おんなに長い雨
ライバルの視野の中をしかと踏む
閉じた眼はすでに昏許すとき

羅紗を裁つ鉄静かな京訛り

大阪市 川口弘生

独り来て一人の味がある食堂

人間の偉さロゼッタ石が読め

刻まれてから拝まれる石になり

新しき井戸端コインランドリー

両方が正義と言うてる選挙戦

富田林市 和田維久子

本物の味を葉脈からさがす

おもちゃ箱毀す大きな秋の音

海峡の波の高さよ母逝きて

守れない約束もあり益櫛

たそがれを好む私の墨の色

大阪市 中川滋雀

流れ星還らぬ愚痴の果てへ消え

敗戦を聞いたあの日も蟬しぐれ

初七日の灯りに遺影まだ笑い

謎めいたひと言もしやの血が慌て

避雷針守り切れない更年期

倉吉市 奥谷弘朗

建前と本音でもめてる有事論

背伸びする男に悲しい過去が見え

肚割って話す男に裏切られ

焦点がぼけているからなおもつれ

お互いにまさかと思う恋仇

鳥取県 鈴木村諷子

鳥籠をのぞき化石のように佇ち

ひと掴みの髪之母とはなり給う

不退転の意気で時計の針進む

秒針が子供のようにかいまわる

このうちは電話のベルもちがう音

鳥取県 川崎秋女

越子さんへ

もう二度と聞けぬ阿修羅の詩吟かな

蟬時雨己を裁く座禪くむ

石臼の重みに耐える語をさがす

潰物の石です己をわきまえる

停退のここもあつちもみな疼く

富田林市 岩田美代

よくよくの事炎天に帯をしめ

八月の死人届けた流れ星

裏切とはいまだに思いたくもなし

アドリアが多い女の大バッグ

またしても貧乏くじのねぎ坊主

松江市 舟木与根一

認め印でよいかそうかと引つ掛り

ひと廻りして噂ではなくなりぬ

長寿の秘訣俺の嫌いなものばかり

風鈴が止って昼寝起こされる

天秤にかけた結婚だったはず

松江市 小林 孤呂二

橋までと湖都の歩みは下駄のもの

箆竹にすがる女の薄い眉

もう秋か酒の美味さが舌にのる

洗濯の数で幸せ足りている

無口な子無口な母が居てくれる

松江市 柳 楽 鶴 丸

座卓の一本は義足です

日程を書くと嫌うカレンダー

何も彼も忘れて大橋を渡る

ブランデーグラスがクリスタルな恋にする

試験管ベビーのルーツは竹取物語

竹原市 小 島 蘭 幸

一番にもう朝刊を読まぬ父

妻の里ごろりごろりと蒸し暑し

石段の高さに祈りある墓参

パチンコ屋みんな涼しい顔をもつ

あなたを許すことから平和始まりぬ

藤井寺市 児 島 与 呂 志

叱られることがまだあり若いから

何事か人のお役に立つ日々で

妻だから言いたいだけを聞いてやる

心だけ炎えて熟年孫と居る

気まぐれの旅にさせたく無い絵筆

島根県 堀 江 正 朗

手さぐりで挑む佗しき湧いてくる

視覚もう忘れた指が思案する

ほろ酔うて口軽くなる愚かさに

慌てたら邪魔するだけの手が慌て

音の厳しさ昨日と同じ音でさえ

島根県 堀 江 芳 子

ベソかくと六十歳の顔が逃げ

たった二度あがった風邪の熱に負け

言いかけた言葉を閉じて負けておく

いい夢を欲しい寝巻きの柄も選り

久し振り逢うてうどんでよく話し

大阪市 室 谷 徹 舟

東大を出して親見ぬ子に育ち

善い事だけ考えて寝る健康法

三面は暑さ忘れる様な記事

冷房車睡眠不足の多いこと

大ジョッキああ幸せな喉の音

米子市 小 西 雄 々

女かなし離別の海へ背を向ける

遠回りして道連れと見た砂丘

何時からか峠の茶屋もレストラン

女傑とも言われ離婚歴をもち

背信の瞳にも聖母笑み給う

米子市 八 木 千 代

深夜なお蟬狂い鳴く友が逝く

散り際の臉にきつとあの絵巻
夢のいろ残す柩の夏衣

今にしてあれは最後の大花火
天の川淋しがりやを頼みます

米子市 林 瑞 枝

拭き消せぬ邪心へ滝の音しきり
そろばんを避けて摺んだ青い鳥

宿題へ父の辞典も錯びて来る
別々の時限夫婦にある誤解

砂浜のリズムに合わせ蟹の爪

倉敷市 稲 田 豊 作

気宇大に持てよと喘う峰の風
善人の落書平和の鳩を描く

背な一つドヤしてからの褒め言葉
嫁ぐ娘を論す正坐の父と母

宿浴衣男の罪を知っている

松原市 玉 置 重 人

通知票係は平気なカブト虫
サラブレッドでもないのに男走らされ

母一人子一人仲人念を入れ
自動ドア考えようがためらおが

真実は一つボトルを傾ける

神戸市 中 村 ゆきをを

心障児かかえて母に旅はない
苦勞とは母という名の代名詞

スマイルは人生航路のパスポート
学歴と人格だんだんかけ離れ
地位を得て平気で雑草ふみつける

堺市 高 橋 千万子

山も海も止められカブト虫と遊ぶ
白ばかり咲く朝顔に裏切られ

流灯もやっぱり岸に寄りたがる
白檀の風人妻のいい匂い

土用ぼし形見の夏紹さらのまま

西宮市 藤 村 女

老夫婦歩巾が揃う夜店の灯
ある日ふと無性に欲しい鬼の面

情熱の海に溺れてみたい旅
恋に生き恋に溺れた日の記憶

可愛がり過ぎると植木も枯れてくる

八尾市 宮 西 弥 生

水に流そうそんな再会だつてある
王将の逃げ道ちゃんとする自信

改名のそれから登りへ賭けている
その先きは天にまかせてマンガ読む

犬と猫もろて来ました別居中

寝屋川市 柴 田 英壬子

一分の祈り真面目と不真面目と
勤続の過去しみじみと蟬時雨
招待の切符に料金書いてある

噴水をさせてオレンジジュース売り
人ぎらい呂川に沿うて秋の道

和歌山市 若宮武雄

煩惱のままに絡んでゐる葛
なんとなく唯なんとなく母の味
無駄骨の定めを崩せない積木
惜しいかな喋りすぎてる晴姿
八方美人やはり男の貌でない

和歌山市 西山幸

今日の悔いあかあかあかと陽が沈む
墮ちる墮ちない墮ちる葉末のかたつむり
ひとり暮らしの掟のなかで選る絵の具
香水びんアバンチュールを溜めている
充実の一日だった大欠伸

和歌山市 浦野和子

赫々と太陽弥陀の瞳に沈む
予言者の髭にまどわされてはならぬ
平和とやあきれる記事の多すぎて
ノストラグムスの予言へ方舟欲しくなる
登りつめた男に白い風ばかり

和歌山市 内芝登志代

太陽はゆがんだ顔は赦さない
秋風へ主婦のころは冬仕度
あきれた顔泣き顔もして聞き上手
自信持ち長いものには巻かれとく

手も足もアホウになりきる阿波踊り

和歌山市 福本英子

玄関も勝手も靴 靴 夏休み
テレビ故障たつぷり時間くれました
団体のバスで足りてる母の旅
他家様へ嫁るには惜しい隣の娘

阿波踊り

海越えて今年も阿呆に行行く

和歌山市 松原寿子

編めばまた着てくれますかセーターを
足跡に真実の花咲き誇り
約束の小指が雨に醒めてゆく
風の渦さけてえにしの糸むすぶ
残り毛糸へ十指が針が炎えてくる

大阪市 津守柳伸

ひと雨はどちらでも好い夾竹桃
なが生きはとても嫌だが医者通い
聞きわけのよさを不憫に思うとき
想い出をまた消しに行く大文字
五十肩女性自身を放棄する

橿原市 岩井本蔭棒

髪型を変えて来たけどもう一つ
薄命へせめて美人の贈り物
だしぬけにあずきを買えという電話
サミットを小さく載せて三流紙

地獄絵の亡者の中に僕が居る

富田林市 板尾岳人

浮雲へ山の墓標は不眠症

犯されて手毬樹海の中に消え

蛇口から紙人形は許されよ

騙されて柱時計は飢えている

鬼灯とちりめんじゃこと数珠を買う

大阪市 那須鎮彦

手さぐりの姿と見せぬ父の背な

スタミナが欲しい私の軍手だな

わが城を守る作業衣干してある

妻といて心臓の音安らぎぬ

手も足も無欲にさせる青畳

島根県 藤井明朗

金出来てからバランスくずれだし

艶聞と見てライバルは見逃がさず

いつか話が作られて渦中の崖に立つ

行革の各論反対せみしぐれ

和歌山市 野村太茂津

戦中の特技か立って眠れる怖しさ

急病へ手を貸す人間丸出しで

他人めく素振りは見せず背をさする

教養を捨てねば救えぬときもある

柳井市 弘津柳慶

さんげさんげ一周忌へ手を合せ

うれしさは旅先々に友があり

見物を無視してバンダ昼寝です

肩書を名刺の裏にも刷って出し

落葉掃く尼僧の頬に泣きほくろ

借りた金返すつらさを知るや君

カタログの様に綺麗に咲かぬ花

延々と続くは夢の宝くじ

倉敷市 小幡里風

歯車の欠けた夫婦に長い夜

夕刊が少し濡れてる通り雨

情熱にいついつい負けて判を押す

砂文字を掬うて果敢ない愛と知る

羽曳野市 塩満敏

勝負師はその一瞬を待っている

やけ酒もあろうかここは新世界

ハイヒールはいて女の第一歩

病歴をきかれて人生ふりかえる

出雲市 原独仙

残暑なお酷しく候蟬しぐれ

ゴキブリが居ても叩かぬ盗み酒

抜き手切る猫背へ拍手 孫 曾孫

のんのんと糸垂れ年金うまが合い

京都市 都倉求芽

日まわりに明日の日蝕なんと言お

窓閉める気にはなれない今日の雨
夕立が今夜のおかず変えさせる
秋風へくもも綱目を繕いぬ

寿と筆とる父にある孤影

暗転のぬれ場よろしく暮となり

人情に脆い男の仏顔

友がけの鮎とは鮎も知らなんだ

春夏秋冬弱音は吐かぬ妻の独楽

桜貝少女の虹をしかと抱く

四面楚歌続きで海が好きになる

表しか見えぬ他人の人生譜

狂人の目にも日本狂うと

作業着の下に一掬の血が流れ

自画像の僕へ勲章などいらぬ

モーニング脱ぐと孤独が顔を出し

又孫へ手みやげという癖をつけ

うっ憤のはけ場へゴキブリ顔を出し

仏にも不運真夏の火葬場

巻く筈の竹へ逆らうつるもある

赤トンボ農薬切った空を舞う

大田市 藤田 軒太楼

竹原市 森井 菁居

鳥取市 両川 洋々

松江市 恒松 叮紅

和泉市 西岡 洛醉

久方の出逢いジョッキに乗る訛
嘘が無いから凡人の域を出ず
梅雨空へ白髪抜いてる妻のひま

大ジョッキ独りの女炎えてくる

賭けごとで弱いのが幸せかも知れず

極楽へ行きたい姑折れている

もったいない一日だった酒の味

昔なじみへ言葉見つけぬまま別れ

二人だけで飲みたいなどとママ上手

例えばの話が俺の胸を刺し

俺に似た通信簿だ叱るまい

蛇捕りが探せばへびの居ないこと

おじぎ草花のいのちを確と知る

忘れ杖いんげんが巻くほどの癒え

地獄どころか霊園の沙汰金したい

性格の不一致それは最初から

まあまあまあ外交行革どうもどうも

しゃんとした首相欲しいがちと怖い

衣食足りて汚ない日本となりけり

核心にふれずに論す親心

奈良市 宮口 笛生

諫早市 原田 明春

兵庫県 河原 みのる

香川県 岡田 拳法

西宮市 野呂 鶴汀

人の群にまじりて己見失い
悲しみや背は悠々と歩くとも

男下駄女住居に用があり

神戸市

仲

どんたく

うとうとと芽出度き齡を長らえる
千年の齡の音できしむ鉦

信州の旅

白樺の緑区切りて風の私語

白頭を滅却すれど九十九折り

東大阪市

森下愛論

押売りも当世風にて桁ちがい

一日中怒鳴って俺は戸主なんだ

定期券小さい鈴の少女趣味

満員の吊皮働らく腕ばかり

東大阪市

竹中綾珠

急な入院落し穴に落ちたよう

夾竹桃の白涼し気な街堺

一ト月振り退院して来た家広し

魂帰りに給うを信じ膳作る

東大阪市

崎山美子

弱点が魅力の中となつていき

逆境に耐えた自信がものを言い

人生の余白を飾る趣味を持ち

ふる里は知らぬ他国の顔となる

宝塚市

傍島静馬

負けずぎらいに老化現象容赦なし

見舞客の前では痛んだことがない

ここだけの話で儲けたことがない

宿題をしたかしたかと蟬時雨

大阪市

西森花村

漫画雑誌ローンの事は出てこない

夕立雲のように行革それてゆく

お互いの誤算にふれず老夫婦

高層マンション大阪弁にそっぽ向き

大阪市

江城修史

今いちど逢いたきひとよ流れ星

ひび割れの世相に重たい義理を下げ

もつれ糸ほどき敗者の顔でいる

生きる糧居職の灯恥とせず

大阪市

河井庸佑

弱点をつかまれたらしいむきになり

言わそうとすればする程具になる

入れ知恵のもう種切れの電話口

執念をひしひし感じる墨の跡

大阪市

天正千梢

財産にもたれて享楽に悩んでる

その後の暮らしにひびく荷を飾り

光るもの抜いて旧知の友と会い

大切な話へ目の玉動きすぎ

大阪市

黒田真砂

引き金を引いて女にある打算
炎昼に石けり女負けて居る
女の瞳の涙にゆれた水中花
巨人負けた日には夫のよくしやべり

大阪市 藤田 頂留子

あぶくの一つ閉店ミニスーパー
商戦のきびしさバーゲンピラの数
八月のチャンネル野球と怪談と
金欠と故郷ないのが街を行く

大阪市 本間 満津子

介添えがステキで白杖羨やまれ
宴席に飲めぬ阿呆が呑む持薬
花ことば星占いとこころ揺れ
散歩路犬が逢わせて呉れた人

大阪市 神夏磯 道子

気に入ったバッグ夏を連れ歩き
少しずつ妥協をしてる三角形
百日紅に負ける土用の昼下り
南瓜の蔓に迷いなどはない

大阪市 北 勝美

原爆忌忘れてならぬ野球熱
鮮かに夾竹桃とさるすべり
バスの屋根柳が撫でる朝の街
雑穀屋を雀が知ってる朝の街

大阪市 欄 蘭

遅れ馳せ残念石が修羅で来た
扇風機酷使こくしの熱帯夜
闘病誌雲の変化を見て飽かず
失業中へ友人就職頼みに来

大阪市 西出 楓 楽

クーラーを冷えたビールのために止め
ブルーマウンテンしゃれた会話がしたくなる
確率予報に振りまわされた洗濯機
もう少し馬鹿になりたい坐禅組む

大阪市 清水 健 司

七光り俺はぬけだす時をまつ
謀叛した大工に残る傷のあと
あいつには儲け話は言いません
革命が起こればエプロンはずすだけ

今治市 越 智 一 水

母の部屋隣り合わせに母守る
よりそうて恋が動かぬ遠火花
打水のそこから三味の音がきこえ
吠えること犬がわすれた昼さがり

平田市 久 家 代 仕 男

せせらぎの音に落ちつく里の宵
端座して静かに闘志充電す
ロボットに主役とられてから無口
芽の芽に執念があり舗装抜く

生駒市 草 深 醉 升

のぼり串養殖鮎で我慢する
土砂降りが止んで三日月知らぬ顔
意のままに雨読もならず梅雨が明け
滲む汗老いの眼鏡を曇らせる

奈良県 村上春巳

蟬取りの子供に脱皮したばかり
炎天へ稲の緑に安らぎぬ
器用貧乏人生五十のいそがしさ
助手席の妻はいつでも眠ってる

松江市 梅本登美也

シャンペンの音がききたいプロポーズ
絵看板婦人会から異議が出る
水鏡はかない過去が揺れている
助け合いながらあやつる夫婦舟

奈良県 森田カズエ

新学期身長計へ背のびする
薬師寺の塔へ一刷毛雲流る
自分だけの足音がある早出番
電子レンジ買う気積立またふやす

岡山市 時末一灯

舞台裏きいて一升瓶と寝る
舞台裏見すぎた男のサングラス
過去多きえくぼとカルテへ書いておく
破鍋に綴蓋銀婚へ辿りつき

東大阪市 齋藤三十四

旅人の明日へ夕日赤く映え
証言に揺れる心を見すかさず
阿波おどり六十八歳腰のばす
体験はありますと声小さし

松山市 谷真風

お多福の笑顔を中心として茶の間
小さく小さく小さく消えんかな
曲る釘ほんとは素直かも知れず
腕組んで互いに暑くない若さ

姫路市 大原葉香

生かされた命一杯蟬は鳴き
文化住宅鉄の音して門扉開く
目に見えぬ運命に生きる車椅子
蟻の列蟻の哲学もっており

宇部市 平田実男

げんこつを呉れたこぶしもやせ細り
ほろ苦さ娘の許婚者とかわす酒
この汗がやがて希望を満たす汗
レポーター人の不幸も飯の種

笠岡市 松本忠三

夜店から買ったばかりの亀が死に
仲裁が氏神どころかけしける
番犬が誰彼となく尻尾ふり
女房の語気が証提を握ったか

倉敷市 藤井春日

突張って見てもやっぱり平は平

法螺貝の音から石槌山開き

螢追う子等の姿に僕を見た

平凡な暮しこの幸福を逃すまい

寝屋川市 宮尾 あいき

蚊取りマット虫も殺さぬ薫りして

長崎は今日も晴やと旅だより

熊野産大阪入りの籠のせみ

迎え火をたいて亡夫の夢を待つ

美祿市 安平次 弘道

盆栽といつまで語る人嫌い

夏休み朝から塾を張り切らせ

酒ちびりちびり仮面がずれてゆく

症状があるから医者怖くなる

鳥取市 岸本 無人

提灯の家紋が笑ってたたまれる

ものさしを斜めに当てた日の不覚

好きな色ぬって思い出あためる

記憶にはないがアリバイなら言える

鳥取県 清水 一保

俺一人の夏と思うと暑くなる

炎天に堂々と咲くひまわりよ

ロマンズの跡とも知らず波が消す

人生に追越禁止考えぬ

鳥取県 林 露杖

父音痴ギター離さぬ子が育ち

男一匹避けて通れぬ道がある

橋涼み噂のひとの裾に風

熱帯魚女涼しく身をかかわす

出雲市 板垣 夢酔

ブラットの雀は稲穂など知らず

出しゃばりの見栄を打算の目が笑う

ストの旗羨望している小商人

いつの間に事故車をハゲタカ喰い荒し

米子市 増田 竹馬

悼 佐伯越子さん

ああ大輪の向日葵西へもう咲かず

齒に衣を着せて己を見失い

三度目の職はタオルを腰に下げ

悪乗りをして女房の眸に出会い

姫路市 植村 客遊子

チロリンとコップが似合う太い指

血圧の高さご先祖からのもの

コーヒー屋へ車で五分程走り

来たら寄れ寄れとばかり言うだけで

町田市 竹内 紫鏑

随筆のレレール狙われる

全集はいつ読む働き蜂の家

昆虫はビデオを嘲うように跳び

氣象衛星雄大な墨絵描く

岡山市 川端 柳子

いとこは嫁似とほめてつつがなし
特別の計らいハッピーとは言えぬ
哺乳壺ママの背中の旅に出る
切り紙のようなヨットよ油壺

守口市 野呂 右近

歳取れば判ると深く言わず置く
声高い女で悪意も無さそうで
干渉せずされず静かに老いの日
過去の人恋うて指折る運咲く日

青森県 五十嵐 操史

絵に書いた餅に高砂踊らされ
老獺も人の子落す畏に落ち
同胞の足を引つ張る派遣団
思い出は年齢買うて呉れた人

神戸市 山口 美穂

偽りかも知れぬ言葉に酔うている
馬鹿だねと他人はつめたく言い放つ
さるすべりの紅よわたしは迷い蝶
明日のこと猫の尻尾と髭にきく

京都市 山本 桐下

妻子との指切り温し給料日
住所録開けば炎ゆる曼珠沙華
待ち駒を打って煙草のうまい朝

ふるさとに消えぬ灯があり見舞うなり

米子市 石垣 花子

勲章をもらう頃から暇が出来

親友越子さんの死へ

闘病の苦しみ越えた棺の顔
満ち足りた年月へ神の嫉妬かも
思いい出を手繰れば病魔の影が居た

米子市 雑賀 美世

欲待を受けて催促言いそびれ
宿題も母ここまでとつきはなし
ハイミスの贅沢香水使い分け
窓際で無口同士が向かい合い

米子市 桑原 伊都

雑魚だけがかかり大物網を逃げ
お揃いのゆかた踊りの輪にとける
蟻の道たどれば疑問とけそう
登山靴ぬぎ花嫁の父となり

米子市 青戸 田鶴

石だたみ石の文化に見る重み
盛り上がる勝負男の貌にする
温かさ悲しさ亡母は遠くなり
結ばれたえにしの深さ姑を看る

米子市 菅井 とも子

手作りの茶碗いびつの温かさ
音の無い夫にもらさぬ耳となり

盛り上げる国体道路で行きづまり

故越子さん

顔面も思わず泣いた雨の葬

島根県

梅 みどり

人形となる日へ無口つかはれて

原点にかえり絵皿にもえる彩

飼育する虫さまさまな子の宝

あじさいの七度炎えた夏の雲

島根県

榎 原 秀 子

おにやんま舞込み盆のくる報せ

さるすべり赤さも赤く寺の庭

なじり合いそれも遊戯の夫婦仲

去んだ子を慕うて死んだ籠の虫

島根県

錦 織 文 子

露草のひそかに炎えている風情

面影がグラスに写る独り酒

砂浜の思い出女だけは忘れない

たたみ這う速さを追うているカメラ

島根県

角 耕 草

乳呑子を母に渡して盆踊り

踊りの輪よく笑う娘がひとり居り

朝市の妻が上手に茄子を売る

日に焼けてプール監視は嫁の役

西宮市

杉 浦 婦美子

我が儘を個性の強さなどという

ナイターは雨で碁石が間を埋める

阪神が負けて撫然の酒となり

久し振りの友が自慢を置いていく

熊野市

坪 田 冬 花

この犬もメスかと思うブルドック

方言が出て標準語あわてさせ

今年から蘭に凝り出す父も年

留守番へ自分の影も怖く見せ

寝屋川市

江 口 度

電柱の短かい影でバスを待つ

盆踊り昼の槽は眠りこむ

夏祭り神楽舞う娘もアルバイト

背のびして此の世の終り覗かない

兵庫県

辻 文 平

好きでない方の女とうちとける

言い勝った方の女も泣いている

親も子も同じ顔して夏みかん

生涯の一コマとなる絵具皿

海南市

牛 尾 緑 楼

キリストも釈迦も存在せぬ若さ

夏休み母と息子にある会話

ある日ふと事故当事者という汚名

風船の個性で風にさからえず

岡山県

直 原 七面山

恋を経て段々熟れて行く女

酔つても膝を崩さぬ未亡人
口付けで妻の不満を封じ込め
熟れ切つてトマトのような女の子

堺市 大道 美乙女

人形になれぬ女の髪が炎え
乳ばなれそつと泣いてる机椅子
埋れ火が炎と燃えるチャンス待つ
天職と信じる汗は苦を言わぬ

岸和田市 清野 こゝろ

男一匹信念通す意地を持ち
母を越す背丈へ嬉し母の顔
成功のかけに哀しい裏話
父母の居ない故郷が遠くなる

富田林市 中村 優

惜しまない一万円的美顔料
黒子着た才女が関白引き回し
晩年の夢晩鐘の絵が招く
コップ酒三人寄ればラツパ吹く

和歌山市 坂口 公子

たまゆらの命をうたいあげて蟬
緑山へ死ねぬ死ねぬと見惚れ居り
せき切つて雨戸繰る手を蟬しぐれ
代役はならぬ夫の黒い星

和歌山市 杉田 周穂
風通し良くする人事と押し切られ

結局は慌てなくても良い結果
若き日の夢を果した友の酔い
間違いを犯さぬ長女縁遠し

大阪市 西川 善紫

老いの坂古稀の関所も無事に過ぎ
教養は無いが人の道は誤らず
愚痴聞いてやれば身勝手なことはかり

大阪市 村山 光輪

手造りの茶碗人柄しのばれる
長男のハンドルで来る墓詣で
おみやげへ祖父祖父なりの物を選び

大阪市 神田 秀峰

バチ当り五体満足愚痴並べ
越境の入学させて親自慢

朝日見す夕焼け知らぬ地下勤務

貝塚市 行天 千代

子はうれし親はうんざり夏休み
崩れては又積み直す人生譜
紫が好きで早ように後家になり

唐津市 新岡 回天子

鮭料理向うが見える程に切れている
ドラマの人生功罪もなく養老院
年老いて毎日病院病名のみかわる

竹原市 時広 一路
カレンダー赤い数字の要らぬ職

爪赤く染めて権利を主張する
殺生なことは言うまい酒・煙草

出雲市

吉岡 きみえ

うわべだけ飾つて人間みな孤独
出る釘のその情熱を買つてやり
割りきつてしまえば涙も出ぬ話し

出雲市

園山 多賀子

差し向いジョッキも男女平等で
独り言失語症にもなりそう
百日紅身を慄わせて被爆の碑

出雲市

石倉 芙佐子

捕われの身となるトンボ透き通る
人妻へ深夜を知らず鳩時計
はしゃいで淋しい夜は笛を吹く

仙台市

川村 映輝

妻我慢夫も我慢今日を無事
自己主義と民主主義をはき違え
動かない風鈴あおいで見える暑さ

枚方市

稲葉 星斗

青い目も交り巡行鉾を引く
青春は黒ん坊同士で語り合い
鮎釣り師忍者の如く瀬を歩く

倉吉市

渡辺 菩句

父の忌やかかげに父の貌を見る
夕顔の家に住むのはどんな人

シャワー浴び恨みつらみを忘れてる

河内長野市

井上 喜醉

正義感内緒ばなしは嫌い

限界を知つて二次会そつと逃げ

入道雲潰れて本性見せ始め

大東市

土岐 トク子

乗鞍、鉢伏御花岳で
這松の命枯れても山を這い

から松のダムの湖水に立ち枯れて

七曲りバスは乗鞍山頂へ

東大阪市

奥山 弥山人

つかの間の命をおしむ蟬しぐれ

朝顔の水をたのんで里帰り

二代目の未熟といえぬ名セリフ

岸和田市

古野 ひで

ミシン踏む心もはずむ孫の服

薬づけ薬途切れた日の不安

障害者の生きる姿勢に魅了され

岸和田市

狭間 希久志

立秋に必死で鳴いた油蟬

アベックで飲んだビールの後遺症

宮仕え目色顔色見た半生

岸和田市

原 さよ子

婚約へ親子が違う構図持つ

傷害兇に好かれる私になっていた

教え子のいたわりうれしさと淋しさと

岸和田市

福島 せつ子

七夕を手伝い子供になっていた

妻の留守ビールはちゃんと冷えている

出荷した昆虫買いに百貨店

鳥取県

金川 満春

和の為に自分を捨てる年の功

古稀へ来て札幌無縁悔いもせず

御陰様の心信仰近づける

兵庫県

藤後 実男

根回しをして腕組を解き始め

義理一つ捨てて小さく溜める金

もう過去を振り返らない今の地位

石川県

細呂木 魯木

現世の極楽金で換算し

コップの中で今日を逆わず

好奇の目を網にかけてる女郎蜘蛛

羽咋市

三宅 ろ亭

シャボン玉瞬時の世界見届ける

似て非なる話に耳を傾ける

ネコじやらし一本差しにすりや風雅

三重県

川上 溪水

口出せばそれが甘いと叱られる

音痴とも知らずに眠る子守唄

三食昼寝入院だから喜べず

鳥根県

大野 酔夢

忘れたい旅へ土産もついでくる

まな板のリズムに女の詩がある

燦然と夢が孵化する子の枕

鳥根県

木村 はじめ

サミットの華麗な裏にソ連病

振り返る俺の人生半ばもの

偽りの愛の日もあり五十年

鳥根県

山根 峰雪

勲七等貰った祖父は偉かった

ふる里にメダカの小川消えており

自動車つ子今日は鈍行に乗せてやる

岡山県

岩道 博友

晩酌の話に謎めく種を持ち

展覧会今日だけ通人らしい顔

狂い咲きしたのに珍種と持ち帰り

岡山県

荻野 鮫虎狼

一本は僕が増やした妻の皺

大正の騷酔いたい日が続き

本心が喉から覗くほどししゃべり

岡山市

井上 柳五郎

汗ほどに拂ってない仕事振り

心配が怒りに孫の遠遊び

筆まめの葉書表書きまで締め

高知県

松岡 三吉

愛一つ梅干一つ入れてあり

あまりにも真面目に別れ寝つかれず

念にねん入れても生れつきの顔

高知県

迎え火へ亡夫の見立てた浴衣着て

シャンデリアアローンの事は忘れよう

石女の回転木馬に戯れる

振れば鳴る振らねば鳴らぬ錆びた鈴

出る釘になるななるなと独り言

涼しげな顔で桂馬がせめてくる

それ以上曲ると臍がちぎれるぞ

夫人同伴満点亭主になりすまし

列外に出て殿が見えてくる

アルバイトだから汗は気にしない

正座して胸つたう汗かるくなる

受け止めてふっと涙をかくさない

眠ってるとき宝石の恙なし

年寄りの幸は両手で受けとめる

喜寿の日が迫り死などは恐れな

回れ右して良心にほめられる

自惚れはどこかへ捨てた年になり

晩酌の時間どおりに爛がつき

赤川菊野

本田恵二朗

正本水客

浜田久米雄

風鈴がさらりと秋をつぶやきぬ

お隣りの屋根が気になる鬼瓦

見解の相違をわらう雲が行く

どっちともとれる神託保証なし

生命の子約ムニヤムニヤ返事する

論すまいくやし涙が虹になる

老いほけを補う距離に妻がいる

授かりしはいのち今日をどう生きる

この店も流れ女の吹きだまり

爪切って指十本のありがたさ

いい話だけ補聴器をかけて聞き

嘘つきへ相槌うってやる情け

屈託のない日々ご冥加へ掌を合す

早寝して昔の夢でも楽しまん

孫だけが心を許す友となり

母病むに紅白の別花に多し

砂時計突如龍巻母が死ぬ

その朝も髭を剃ることからはじめ

合歡の花母の乳房を焼いて来ぬ

朝々を羯諦羯諦と悔いつづけ

尼 緑之助

川村好郎

若本多久志

橘高薫風

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

工藤 甲吉

金運はないが病院など知らず

嘉数 兆代賀

何物にも勝る幸福は健康である。どたい人間は金など必要以上に持つとろくなことをしない。贅沢な生活をしたり、享樂的な生活をしたたりしても人は誰もほめないし、人間としての値打ちを下げるばかりである。もつとも金を生かして使えば話はまた別であるが、とにかく金というものは必要なだけあればよいということにして置こうではありませんか。弔電を誰にむかつて披露する

鈴木 村颯子

言われてみてなアるほどと思った。弔辞は霊に向かつてのべるが、弔電は参列者に向かつて披露されることが多い。うまいところを突いた句である。それにしても型にはまった政治屋の売名のための弔電はウンザリ。

梅雨明け宣言やっとおしめが取れました

小島 蘭 幸

梅雨明けをおしめがとれた二、三歳の幼児に擬したのか、反対に幼児を梅雨明けに擬したのか。いずれにしても表現の巧さに感服。財政逼迫されど役人のポーンヌよ

岡田 拳法

別に妬むワケでもないが、それが皆国民の税金だから庶民が腹を立てるのも無理がない。川柳は健全野党。その意味からもこんどの人事院勧告の行方など特に注目したい。どのように逃げても影はつきまとい

若柳 潮花

しがらみの中に生きる人間の宿命である。釈迦は人生は苦なりといった。生老病死の苦しみ、愛する者と別れる苦しみ、厭な者と会う苦しみ、欲しい物が手に入らない苦しみ、人間の存在そのものの苦しみもまた人生の苦に数えられるという。これらを逃れるとなると「悟り」以外にないが、凡愚は哀しだ。居眠りへ薬缶の蓋が笑つてる

柳 楽 鶴 丸

笑つてるが笑わせてなんともまた愉快な句である。深刻ぶつた句がはんらんする時今、ときにはこんな川柳があつてもよい。騙すより騙される身をあきらめる

松 本 忠 三

この人は善人である。第一、人を騙して何がたのしいものか。それに因果応報というものもある。騙された口惜しさも分からぬワケではないが、そのほうがいい。

この道はいつか来た道右の道

仲 どんたく

レーガン米政権への要求にこたえる軍備拡大、右傾化路線へののめり込み。そして防衛白書は「国民に『有事の覚悟』を迫り、『国を守る気概』と『愛国心を持つ』ことは国民の務め」と教育の分野まで踏み込んだ。しかも「灯火管制」「警戒警報」「住民退避壕」などの生々しい言葉を伴って、民間防衛の必要性を強調した。まるで時計の歯車が三十六年前へ逆転したかと思つて、慄然とするものを覚えた。戦中、川柳も戦争の一翼をになわせられた苦しい出を残しているが、こんどは戦争反対と平和を守ることに努力をせねばなるまい。ただし「左の道」も要注意。

くちなしの匂いにつられ立話

越智 一水

満開の百日紅を庭の前を通る人たちが、今日もほめてくれる。中には全く知らない人までほめてくれるので、ヒマ人のこちらもつい話し込んでしまう。それも花のことから新聞の三面記事のことまでも。

ポツクリ寺の本当の名を知らず

欄 蘭

世間には紳名だけで通つている人がどこにでもよくいるものだ。それがいつまでも長く続いて古くなると、他人はいつからかその人の本名を忘れることが間々ある。だから時に人にその人の本名を聞かれても分からなかつたことが実際にあつた。ましてポツクリいきたい事のみ祈る人にポツクリ寺の本当の名前が分からないのも無理がなくその必要もなからう。面白い句である。

川柳太平記 (41)

情けない狂句の遊戯性

東野大八

川柳が雑俳という俗称に甘んじ、後世まで世の蔑視を浴びる一因には、その極端なまでの遊戯性にある。これも連衆の支持動員を図る業俳・遊俳点者の、糊口を癒やす媚態がしからしめるところである。

これらの遊びは連衆の集いの場の肩はぐしあるいは四季の催し、神社、仏閣の奉納句会の場で幅を利かせた。以下主なるそれらの遊戯性の趣向の主なるものを挙げてみよう。

まずモジリ、これは五七五の中の七語で上

五下五の全く別な事柄をかける洒落である。

―俳諧師 はらみくをする 若い後家

中七は(孕み句と孕み苦)の意味だ。

―面替屋 つつみをなおす 川普請

中七が(包みと堤を直す)の意味だ。

(ぎが「回文」本来は「廻文」と書く。明和ごろ(一七六四)正月の宝船の賛に

「長き夜のおの眠りの皆目ざめ、浪乗り船の音のよきかな」

が元祖である。つまりこの賛のうたは、逆さまに読んでもまともに読んでも全く同じ意味になる面白味にある。これが十七字に転用され、幕末頃に再燃流行した。

―草の名は知らず珍らし花の咲く

(嘉永七年)

―妻の閨覗くも凄き屋根の松

(文久元年)

この回文やさきのモジリは柳多留・柳宮の末巻によく見かける句だ。

さらに「字割り」というのがある。

―踏むたびに沓すれの足を削るまじう 丸十
―植木店直値ができて木を渡し 涼軒
―これの向うを張って「詰字」というのがあ
る。字割りの逆である。

―火の側へ扇をつけて煽ぐなり 保香

―親切は心忽ち人が惚れ 春堂

まことに他愛のないものだが明治の絵雜誌

「驥尾団子」に六〇冊にわたり、いずれも連載されたから、かなりの人気があったらしい。

そうかと思うと「いろは尻押し」がある。

―娼でなし妾でもなしただの いろ

―金無垢で入れたは為になる入れ は

またある。「考えもの」これは江戸の三河

屋甚助が、天保一五年(一八四四)から十冊

も続刊した「たねふくべ」が原典である。

―材木屋丸太のほかは柱なり

考えるカギは「俳諧師」答は「木角」こ

れは往時の風流人の名である。

―仲人を呼ぶほど夫婦言いつのり

考えるカギは「ケモノニひき」答は「去る

居ぬ」猿・犬」といった調子だ。

明治開化期には、川柳・狂句には地口・駄

洒落が横行した。至極他愛のないものだけに

人によっては不快感を催すしるものが多い。

幕末から明治開化期にかけ、世相の不況と

物価高に殺伐なムードが、こうしたラチもない酔狂戯文の遊びに拍車をかけた。それが大正中期から昭和にかけ、娯楽雑誌に氾濫した「へなぶり」「冠句」「ものは附」「謎々」の読者文芸を生み、往時破額の一円、五円、ものよつては十円の懸賞金をかけた。米一升三十銭見当の頃であるから、相当の反響であった。(発行元は大日本雄弁会講談社)

こつみると初代川柳の文芸性から川柳も変れば変わったものである。こうした狂句性の帯びた「遊戯性」に生きたのが、世襲の八世・九世川柳である。徹底したラチもない運座・句会の余興的趣向の興味が興じてか、九世川柳の時代には二人宗家の家元争いのアトラクションまで演じる始末であった。

まず八世川柳から入ると、その立机にゴタゴタが生じた。八世は任風舎川柳・兒玉環・俗称大久保左金吾。別号括裏舎柳袋。東京下谷の袋物商である。六世に師事し狂句を学び七世の推薦で八世を継ぐに当り、イチヤモンがついた。ために立机に当り、一府三県の狂句連の投票にかけた。ライバルは、後に九世を継ぐ前島和橋である。

結局、この争いは、年寄に花をもたせることで落着したが、任風舎川柳は立机後に点

者生活六年で明治二十五年十月他界した。享年七十二。辞世は

― 散るもよし柳の風に任せた身

幕は小石川の林泉寺にある。

九世を継いだのは、もちろん前島和橋だ。

無名庵川柳・柳号万治楼義母子。七世の時代から頭角を現わし、明治十六年九月「狂句百面相」(文成堂刊)を出版し、同二十年には自ら主催して五世・六世の追善柳風狂句会を開き、同二十五年一月には「五世川柳翁略伝」を刊行するという実力者だ。

これだけ出来る九世だったが、図らずも、「おれこそ九世で宗家継承の有資格者だ」という対立候補が出現した。その人物は自称九世正風亭川柳・中村万吉・柳号を臂張亭メ太といった。臂張亭と名乗るも道理、紀州家出入りの豊家である。麴町の達磨門の傍らに住み、三代統きのレッキとした江戸ッ子を自負し、常盤津、清元、義太夫は女人なみの粋がり屋である。狂句は二十四歳から六世川柳に学んだが勇み肌の地を出し

「七世・八世は袴(かみしも)を着て、長靴を履いたような句が多い」

とけなし、時に明治憲法が發布され、帝国議會が初めて開かれたのに乗じこつ意気まぐ。

「九世の宗家も万機コーロンで決めようじやあねえか」

そして初代川柳の画像の軸や、初代川柳直筆の錦木の廻文(前章参照)をふり回し、結果はメ太が社中投票で勝った。こうなると窮余の策で和橋、メ太との対抗上、三世で絶家した柄井川柳の柄井家を再興して柄井川柳を名乗った。号も無名庵のほか、初代ゆかりの緑亭川柳に柄井川柳まで名乗ったのである。話によると和橋の妻の常子刀自は、大正末年まで柄井姓を名乗っていたとある。和橋は浅草の雑貨屋で、日本橋の袂で生れたので和橋とつけ、その橋の架った年号にちなんで万治楼義母子とつけていたのである。

しかし、この二派の宗家争いも明治三十一年十一月メ太が七十四歳で死去し一件落着いた。辞世がふるっている「戸締りを頼むぞわれは先に行く」墓は和田堀の常仙寺にある。この六年後の明治三十七年四月、和橋も齡七十で死去した。墓は竜宝寺の柄井家のある境内で

誘われて行くなら今も花の旅 川柳

この九世の辞世は十世川柳・狂句堂平井省三(別号雪雁)が、同境内に句碑にして建てた。

俳風柳多留廿六篇研究

(三丁—四丁)

石田晋一・南 得二・小野真孝
本多正範・石田成佳・大屋六郎
八木敬一・鈴木 黄・多田 光

故岡田 甫

50 跡はさみ箱かおめかけ不足ク也

石田晋||御妾は「御めかけは二世と三世の間の物」(二八・一九)で、行列も正妻と同等に扱われず、行列の後、挟み箱の後につくことになる。「奥様より殿の寵愛があるのに」と不足であるというのである。

小野||礎稿の如くと思われませんが、それにしてても句の語呂が悪く、何かもう一つすつきりしません。

多田||わかりにくい句。断定できない。正室との差別ともとれるが、またお妾の奉公した家が後挟箱の格式であることに對する不足ともとれる。もっと格式の高い家に奉公したかった。

「挟箱には片箱対箱先箱跡箱等の区別ありて、一個を片箱と云ひ、二個並べ用ふるを対箱と称す。先箱は徒の先に並べ、後箱は馬乗物等自身の後に備ふ。万石以下にては先道具(箱のこと)以上の者対箱にて跡道具の者は片箱なり。御三家、加州薩州越前……の諸家は金紋先箱なり」(『江戸町方の制度』石井良助編)。

岡田||正確な史実から申せば、多田氏の解が正解となる。だが、作者の狙いは簡単なのではないですか。詮じつめれば、若殿が生めないうのが、あるいは正妻になれないのが不満……という点に落ちるのかも知れない。そこまで考えずとも、殿様や奥方と同様、自分の着替その他を入れる挟箱が、先箱でないのが不満

……ぐらいかと思うが。

51 吉野から法名の散る暑い事

石田晋||「吉野」は吉野丸。隅田川に浮かべた最も大きな屋形船。「法名の散る」は、法名を書いた経木や紙が川中に散ること。句意は、暑い盆の頃、川施餓鬼を行なっているさまである。

八木||賛。川施餓鬼は七月で、「秋」である。大陰暦であるから、現在の七月とはずれがあるが、それにしてもやはり暑い。

多田||賛。

岡田||賛。

52 御地赤をくつと茶に見る松葉色

石田晋 色の対比で、地赤の着物を着た者を

松葉色の着物を着た者が馬鹿にする、というのであろう。ところが、この対比するものがはっきりしない。新造と太夫、側室と正妻、このあたりではないかと思うがわからない。

多田 礎稿の正室と妾の対比に賛。まず「御地赤」は「御」という敬語がついているので身分の高い婦人のもの。地赤については、『浮世風呂』の岩波古典大系の注に「地の色によって名付けたうちかけのこと」とある。要するに、奥様の召される赤地のうちかけであらう。

「松葉色」は粋な色なのか。結局松葉色の着物を着ている粋な妾が、野暮な地赤のうちかけを着ている奥様をたいへんばかにしている、と解してみた。

岡田 Ⅱボクも大体、多田氏の説に近く考えていますが、違ふ点は、松葉色を着ているのを「正室と見ず、奥女中の老女たちではないかと思ふ点です。

53 山く嶽くを晴天十日見せ

石田晋 Ⅱ山々嶽々は力士の名。○○山、××嶽などという名が多い。晴天十日は相撲の興行。当時は外で行なつたため、雨天は中止。

晴天に山嶽がよく見えるを匂わせて、相撲

興行での力士の大きな姿をよんだ句。

南 Ⅱ賛。「山々嶽々」の訓み方、「さんくがくく」と私は読んでいますが、いかがでしょうか。

多田 Ⅱ賛。やまくたけくであらう。

岡田 Ⅱボクは、サンくガクく説です。山嶽（サンガク）という熟語があるのからしても。

四丁

54 傘と人が花見の中カへ落ち

南 Ⅱ洛東音羽山清水寺、此の清水の舞台から無事飛び下りると観音の御慈悲で、諸願成就されるとの俗信がある。

傘で花見の中へどさら落チ 四・16

琴最中へ人間んと傘か落 二七・15

八木 Ⅱ賛。おもに男女間の願いがかなえられと信じられた。

多田 Ⅱ賛。

そりやとふはくと下タの人かちり

明七礼4

岡田 Ⅱ同。

55 御いんきよと声をからして咄す也

南 Ⅱ耳の遠い御隠居と高声での長咄、慣れな

いので声をからしたという句。補聴器の普及発達した今日では少なくなったが、昔はさぞこうした経験が多かつたものと思われる。

御楽たと大きく耳のキハて云い 拾一・38

本多 Ⅱ耳の遠い御隠居さん相手では、高声で話さねばならず、長咄をせずとも声もかれよう。礎稿のように、長咄・不慣れと条件をつけなくともよいのではないか。

多田 Ⅱ賛。

岡田 Ⅱ同。

56 聞違ひあらとうとなの御馬也

南 Ⅱ『徒然草』第一四四段、梅尾の上人が、河にて馬洗ふをのこ「あしく」といひければ、上人立ちとまりて「あなたふとや、宿執開発の人かな。阿字々と唱ふるぞや」と馬のあしを阿字に間違えたる話。「あらとうとな」は、徒然草本文の文句取。

馬の足阿字に聞たで尊トがり 四五・16

多田 Ⅱ賛。

阿字に柄をすけて出家は尊かり 六八・12

阿字に柄をすけて親父の朝談義 七一・27

「阿字」をよんだ句なので引用してみたが、「柄をすけて」というのは、それに付け加えてという意であらう。

岡田 Ⅱ賛。



順々に嫁く

それだけを羨まれ

新宮市熊野地二一六一二二

大矢 十郎

柳 歴

昭和44年川柳瓦版一行を迎えて浅利
太平、小山峻氏らと共に新宮時事川柳
会を結成、傍ら葵水先生のご紹介で近
作柳樽へ投句。白柳、葵水両先生より
通信指導を受ける。47年葵水、太茂津
両先生推薦にて川柳塔社同人。

47年1月川柳しんぐう吟社創立、み
かん。50年1月川柳塔社第一回各地柳
壇賞受賞。53年川柳塔社理事から参事
拝命。一男五女。

56年度路郎賞・川柳塔賞

受賞作決定

中島生々庵

56年度路郎賞、川柳塔賞の二賞決定がまた
巡って来た。不覚にも六月末右半身不随とな
ったが幸いにも意識及び言語の障害は全くな
く目下鋭意治療中で、お蔭で日に日に回復に
趣きつつあるが、ペンをとる事が不可能であ
るため口述代筆の止むなきに至った事を深く
お詫びし、且つ色々配慮、お見舞等頂き厚

く御礼申し上げます。

なお二賞選考については例年の如く各選考
委員の方々が厳正なる選をされた上、編集部
にて無記名清記されたものを私宅までお届け
頂き、私も特に慎重に選をし、別記の方々を
入選と決定した。

56年度路郎賞受賞

順々に嫁くそれだけを羨まれ

新宮市 大矢 十郎

女の子を持つ親心がはつきりうかがえて
『それだけを』という中五が読者の胸を
打つものがある。

★

路郎賞準優秀作第一席

上役と打ちだしてから棋力落ち

倉敷市 野田素身郎

宮仕えのむなしさが下五の『棋力落ち』
で表現されているのがほほえましい。

同 第二席

元旦の心四恩をかみしめる

青森市 工藤 甲吉

よみふるされてはいるけれども日常の解
怠を元旦の心がよみがえさせてくれる。

路郎賞候補作品

西尾 葉

何くわぬ貌で止まっていた時計
姉妹も五十坂から気が揃い
「歩調トレ」と云いたいようなアーツ来る
北野 久子

松川 杜的

繋がれた犬を野良犬見て通り
ふられたとも言えず一口乗る祝
何もする気がしない寝釈迦でござい
高橋千万子

渡辺 菩句

春雨の中で木蓮座禅組む
ベッドシーン妻泰然と編んでいる
首に鈴つけて名跡継がされる
血液型知らない儘で終りたし
そんな事されては嬉し袖の下
胸に掌をあてても昨日は昨日なり
石垣 花子
河原みのる
大矢 十郎

田垣 方大

横着と云うものフロック当てにする
一筋の枯野見飽きた仁王の眼
本好きと本が嫌いなあねいもと
錠剤を数え五月の空を見す

中川 滋雀

西川 善紫
辻 文平
榭原 秀子
柳原 静香

城を見て俺はどこからつぶそうか

清水 健司

〈準推薦句〉

日本中同じテレビを見る怖さ
嬉しいことに米櫃の米が減る
福本 英子

〈推薦句〉

上役と打ちだしてから棋力落ち
野田素身郎

若 本 多久志

〈推選句〉

元旦の心四恩をかみしめる
工藤 甲吉

〈準推選句〉

その日だけ書かぬ日記が抱く炎
浮世絵の指にきれいな嘘をみる
藤村 女

〈推選秀句〉

永遠の中の瞬時を這い廻り
告白のうなじは白い萩に似て
命日の菊の白さに亡母をおく
信念を貫く雑魚の道はるか
おだやかな言葉に苦勞耐えた味
十指みな強い絆を知っている
両の手に触れる幸せだけは知る

小砂 白江

浦野 和子

中川 滋雀

嘉数兆代賀

山本規不風

内芝登志代

堀江 正朗

川 村 好 郎

〈推薦句〉

巡る四季素直に巡るそれもよし 江城 修史

〈準推薦句〉

子が走る孫が走れば犠打でよし 野呂 右近
私にもどる机に戻る雨の午後 高橋 夕花
弱肉強食それでも独りにはなれず 福本 英子

明日を履く靴を揃えて脱ぎました

水粉 千翁

飲めぬからコップ一杯注いでおく

花柳 潮花

水族館の魚ほどには悟れない

小出 智子

何くわぬ貌で止っていた時計

山内 静水

ガス自殺出前の鉢を置いたまま

黒川 紫香

橘 高 薫 風

唐招提寺あかさかなる落日よ

阿萬 萬的

枕木の悲鳴を聞いたことがなし

森井 善居

定年と知らず張切る大を連れ

遠山 可住

花の下別れ話の人もいる

野田素身郎

武者飾る飢えも戦さも幻に

谷垣 史好

戻り寒梅は墮落を考える

河野 君子

割勘のもつれにレジの無表情

高橋千万子

あじさい寺の冬を想像せぬことだ

小出 智子

歯を抜いて欲を忘れた顔になる 清水 健司

〈準推薦句〉

達磨眼を貫い神通力消える

小島 蘭幸

栄枯盛衰染山だけは残るなり

鈴木村諷子

〔評〕句というものは恐ろしいもので、こうして候補作品を選んで見ると、それぞれの作者の個性が、その多少にかかわらず出ていることが分る。当然のことと言えば当然だが、

作者が、その個性を發揮して競い合ったとい

う最も好ましい結果になった。選者として、

各作者の個性をまで斟酌して選んだわけでは

ないのにこうなった事は、いい作品は、実

個性的なのだという証明にもなる。

個性

正 本 水 客

〈推選句〉

順々に嫁くそれだけを羨まれ

昨日よりきれいな顔を目をさます

単純な頭でピストルが撃てる

飲めぬからコップ一杯注いで置く

嬉しいことに米櫃の米が減る

大矢 十郎

小野 克枝

柴田英子

若柳 潮花

福本 英子

風のように花のようにには生きがたし

高橋 夕花

雨降りを手でたしかめて落ちつかず

間嶋青丹子

コーヒーを飲むのに四面楚歌の位置

大原 葉香

筆不精書きはじめると長くなり

堀江 芳子

お遍路へ鐘がおまけのように鳴る

藤井 明朗

ノンフィクション路郎賞

大矢 十郎

太茂津先生から電話で受賞の句を聞かされて、他人の過去の受賞句の如く、ああ決まりましたか、いい句ですね、と言ってからふと我に帰る。これを真新らしい句であり今、陽の目を見んとする路郎賞であり我が句である事に気付きました。喜んでくれるから嬉しさがこみ上げて来る。近所の井戸端会議が此の句を産ませてくれました。各位へ深謝。



この街の

機械の音を愛す父

大阪市生野区勝山南二丁目一二四

西村芙佐女

柳歴

昭和五十四年二月、勝山双葉川柳会の一員として発足、五十五年五月、緋佐子より芙佐女と改め現在に至っております。

大阪市淀川区生れ 商店主婦
家族 主人 一男一女の四人暮らし

川柳塔賞準優秀作第一席

和の中に生きて夕日のすばらしさ

和歌山県 天満三千代

同 第二席

逃げ過ぎて風が変ったとも知らず

今治市 矢野 佳雲

川柳塔賞候補作品

黒川紫香

帰る家あるから旅が面白い

渡辺 南峰

眼鏡拭く少し素直になりたくて

村上田鶴子

思惑がチラチラ見えて手が出せず

東原 福子

種火まで消して女は去って行く

豊田 巡歩

袋小路と知らず選んだ道を行く

桑原 伊都

仲人が大阪弁でよく喋り

高杉 千歩

和の中に生きて夕日のすばらしさ

天満三千子

〈推薦句〉

淋しくて波紋をつくる水たまり 奥山美智子
再婚の話へころぶ毛糸玉 松岡 三吉
愚痴るときも楽しいときも母の墓

工藤 路子

香川 酔々

〈最優秀作品〉

この街の機械の音を愛す父

西村芙佐女

〔準優秀作品〕

光はもう春のものです針供養 満仲きく子

〔準優秀作品〕

腕時計はさすが如き別れなり 村上田鶴子

〔佳作〕

ふるさとで行方不明の俺に遭う 津山 刀水

天皇の瞳に拾われた野辺の花 有働 芳仙

皆様のお蔭です

西村 芙佐 女

思いがけず名譽な川柳塔賞を頂いて感激しております。働きながらの思うにまかせぬ作句生活ですが、指導して下さい先生方にも恵まれ、また地域の主婦を中心の柳友にもめぐまれた双葉川柳会の真剣な勉強ぶりが、私をささえて下さったと思います。皆様のお蔭で大きな喜びを知ることが出来ました。末筆になりましたが、雅号をいただいた不二田先生にもみていただいたかったという想いで一杯です。

ありがとうございます。

道問うた人にまた逢う旅のこと 浜本久仁松

遠くなる故郷それでも暮がある 越村 枯梢

塩の味最後に知って金魚死に 平井 露芳

蕨 芹 年金夫婦の厨の灯 高杉 千歩

どんな聖書よりも母からきいたこと 市川 鱗魚

高杉 鬼 遊

ただ青くありたいばかり冬の草 東原 福子

死ぬときはみんな一人よ花吹雪 満仲きく子

再婚の話へころぶ毛糸玉 松岡 三吉

又人を信じた貝が蓋を開け 武田 帆雀

大さえも欲得すくでワンという 吐田 公一

解く時を思えば結びようがあり 八塚三五島

応接間バラ三本に隙がない 橋元 美恵

指一本折る一年が長かった 片上 明水

旅行から帰ると鳴っている時計 津山 刀水

〔準推薦句〕

ひとり居て一人だけなるわたはこり

武田 照子

〔推薦句〕

夫婦茶碗なぜ大きさに差をつける

高野 不二

谷垣 史 好

大さえも欲得すくでワンという 吐田 公一

言葉ほど冷たい風はないと知り 朝倉 大柏

じゃがいものどれもかわゆく見える日よ 村上田鶴子

釦一つ男は長い糸をつけ 鈴木 可香

終点で風がこころうさんと言う 津山 刀水

指一本折る一年が長かった 片上 明水

口だけの信心 木魚もそんな音 野々口ゆう也

ひとり居て一人だけなるわたはこり 武田 照子

塩の味最後に知って金魚死に 平井 露芳

逃げ過ぎて風が変わったとも知らず 矢野 佳雲

〔推薦句〕

川柳塔バツジ

矢野 佳雲

川柳塔バツジ

男性用(ネジどめ)

女性用(ピンどめ)

一個 一、〇〇〇円

(送料 一、二〇〇円)

—水煙抄—

秀句鑑賞

—前月号から—

傍島静馬

アルミ貨が路傍の雨にたたかれる

竹内花代子

一円のアルミ貨をながしるに容易に拾いにくいものが、道に落ちていても容易に拾いにくいものである。この場合は雨が降っていたので迷うことなく見逃せた。

（お地藏さんに拾うた一円上げておく）
買い言葉パンチの利いたのを探す

矢野 佳雲

口喧嘩でいつもやりこめられている夫、何か一言妻をギヤフンと言わす文句を探すのだが、なかなか思うように浮んでこない。そのうち間が抜けて嫌や気がさすのが落ちたろう。

酔っている顔へ相槌打っておく

満仲きく子

連日何んだかんだと理由をつけて飲んで帰る夫が、今夜はいつもと様子がちがう。社用が公用か疑えば切りがないので、今夜のとき

ろはおつしやるとおり素直に聞いておく、手馴れた夫の飼育ぶりだ。

親切な老人辻まで出て教え

鈴木 可香

退屈しのぎに近所へ散歩に出た隠居、途中で道を聞かれ、ものぐさの老人が珍らしく次の辻まで案内していった。或は老人好みの柳腰の美人だったのかも知れない。

赤い灯の女はあかんべが上手

豊田 巡歩

海千山千したたかなあばずれを承知で入れあげも男ども、思わぬあぶく銭を掴んだか或は外に野心があつてのことか、こんな女に金を捨てる気持がわからない。

気が向けば男とことん掃除をし

羽津川公乃

平生、タテのものをもヨコにもしない男が何を思つてか、急に掃除器をかけたなり、雑巾がけをしだした。まるで大掃除のように、だが不慣れなのでいちいち要領など教えてやらねばならず、却つて手間がかかり妻にとつて有難迷惑の上もない。

言い勝つた妻が他人のように見え

新居田胡頼子

口喧嘩いよいよエキサイト、一方的に妻に痛いところを突かれればなして、苦戦状態。勝ち誇つた妻のしたり顔がにくにくし。

あつさりこの場は悪者になる勇氣

西本 保夫

会社も定年まで無事に勤め上げ、世間の甘さ辛さも一応経験すみの苦勞人の、あきらめ

とも悟りとも、この境地に到達するまでが容易ではない。

妻の留守独り暮しのリハーサル

佐野 白水

單身赴任を想定してか、或は妻に先立たれた場合を考慮に入れてか、そんな不吉な思惑はないにしても、折柄妻は外出中、思いつくまま昼食に好物のなべ焼うどんを作つてみたが、玉子一つも満足に割れなかつた。

（辛ければ辛いまま食う独り者）

針を持つ祖母のたしかな糸切齒

岩佐 富子

背筋もしゃんと日がな一日継ぎものなどに針を離さぬ老婆が無造作に齒を糸をかみ切るそばで見ている総入歯が羨ましそつだ。

適当にちらかつているあたたかさ

細川 稚代

ほほえましい句である。人間すべからくこれくらいのゆとりを持ちたいものだ。そんなよそらの個性やみには手痛い一矢だ。

亡父恋し色褪せた日記読み返す

島田 昭治

亭主閑白だった父、スバルタ式でしこいた明治時代の父の日記、読むほどに只々怖いだけの存在だった父の恩情を改めて見直した。

（冷やかな父の言葉にあるぬくみ）

趣味のない夫の老後など思う

麻野 幽玄

聞く方が内緒ばなしに気を使い
森脇 和子

水煙抄

正本水客選

大洲市 米沢 暁明

完全な妻ではないが任せ切り

尼崎市 北浦 牧郎

絵はがきへ昨日も今日も旅だより
かまきりも秋を感じた羽さばき
車椅子お前も踏まれな蟻の列
走り書だがぬくもりのある手紙
男には説明のいる落し蓋

島根県 松本 はるみ

いそがしい一日だった手の輪ゴム
妻のものを買う日はぬくい雨が降る
なにか書いてみたい日のある葉包紙
お大事に他人をはさむ別れの辞
まがり角うしろをみれば風ばかり

大阪市 稲本 凡子

香くゆる挽歌と思う蟬しくれ
この城に生きたあかしの石の苔
蒼光りとかけ一瞬視野の内
糸のない凧になりたし夏の雲
面つけてアイヌ大きく鶴を舞う

今治市 矢野 佳雲

ゴールイン出来た二人は虹にのる
うれしい日 雑巾絞る音も派手
空白のままの一日がある日記帖
思考ゼロただ編針が動くのみ
一瞬を命の限り落葉舞う

島根県 星野 侑正

雨蛙晴れたら陰の声になり
本当の河童は日焼けなどしない
絵日記は水泳ばかり晴れ続く
落ちてゆく坂とゴムまり知らず跳ね

カメラマンだから図々しく撮れる
午前五時今日のエンジンかかり出し
ありがちなケースと軽くあしらわれ

脱ぎすてて誰はばからぬのも我が家
主治医には内緒 漢方薬を飲み

高知県 山崎 広 風

でかい嘘肴に飲んで笑い合い

不発弾溜めて娘の里帰り

清流を忘れた川に音がない

言訳を忘れた頃に妻が訊く

まだ酔いが足らぬ酒豪の眼が動く

尼崎市 奥 山 美智子

市場かご気ままに買えるほどの贅

同じこと言つて叱つて子が育ち

洗濯機 今日汚れも消してくれ

あの人の心を風も知りたがり

シャボン玉あしたの夢は抱いてない

名古屋 越 村 枯 梢

エアポート アメリカナイズの猿が降り

コーヒーに事欠かぬ日の有難し

馬鹿と言つた君も僕とは紙一重

生命保険満期で損をしたように

大声で泣くと山彦笑い出す

大阪市 橋 元 美 恵

過去の愛遠くの空の虹のよう

ジ・エンド行先は風に任せる

東ね髪梳けば悪女になりそう

土用干し柱に猫は繫がれる

手作りのカーテン幸福揺れている

兵庫 中 田 白 李

孫へ買う金はすんなり湧いてくる

炭坑節ばかりで終つた盆踊り

たまに来て長女禁煙せよと言

めでたくも保険満期を妻と分け

童謡をひく琴の音が流れてき

堺 市 田 辺 哲 寿

再会で昔の夢をぶち壊し

停年でただの人間に戻される

制服の力で物を言っている

時々酔つたふりして帰宅する

落書に他人の本音が書いてある

岐阜 市 川 鱗 魚

娘の育ちに亡妻を重ねて猪口を伏せ

箸よりもスプーン我が家の食器棚

糸切歯 女は老いをまだ拒む

ポロポロで女は愛をまだ信じ

高槻 市 竹 内 花代子

妻の座をゆるがせる女はもう居らず

仕合せだから仕合せに気がつかず

お手玉で遊んで見たいなと思

蹴とばして見たい自分の影を見る

御先祖へ冷茶もあげて話しこみ 八尾 市 高 杉 千 歩

佗しきは旅から戻り三日たち
ねぶた ねぶた伝統に生きて月高し
親も兎もいとし野布施のおもちゃ菓子

長崎県 岩崎和子

直線に歩いた道にけつまずき
矢印の通りに歩くお人好し
住み心地きいて家賃に触れずおく
母の忌に許して欲しいことばかり

鳥取市 森田熊生

生きている海で生きてる砂がある
再会のドラマに僕を置いてみる
笑えない話 私の過去を見た

行く気ないのが一人いてませかえし

熊本市 有働芳仙

水茎のあと麗しく無心され
折返し点から風の向き変る
肩叩かれて階段踏み外し
水平線燃えているから明日がある

大阪市 津山刀水

許してはならぬと雲を見て歩く
太陽の匂いもしない乾燥機
生かされている仕合せに気がつかず
残り飯チャーハンになる生きている

寝屋川市 稲葉好子

残り火に乳房の白が惜まれて

旅の宿 混浴に恥らうこと少し
思い出のページよいとこ並べ過ぎ
命日に亡夫に逢える薄化粧

鳥取県 羽津川公乃

香水も変え きっぱりと過去を断つ
石つんで積んで心の糧とする
海に生き水平線の陽を拝む
貧弱な裸身で夏を敬遠し

兵庫県 森脇和子

避暑の子が里のなまりを持ち帰り
願ひ星まばたきすれば喋り出す
気苦労も知らず閑人とささやかれ
口ずさむ歌で機嫌が分る父

大阪市 日阪秋子

亡夫にも気兼ねする程年を取り
手仕事へ言葉もしまい込んだまま
そこかしこに落ちてる句材が捨えない
忙しくなって雑用思い出し

尼崎市 丹下玉子

右手病んで左手使えぬもどかしさ
五時起きて犬の散歩の時変わる
絵葉書で告白めいた旅便り
市場かご汗をシャワーで流す贅

大阪市 杉本智慧子

少しかすれて壺の鈴虫第一声

黒砂糖色にこんがり甲羅干す
盆三日街はのんびり夏休み
熟年の背なに過ぎ来し歳の数

鳥取県 和井 観 洋

ドア一寸開けて聖女のはじらいか
深呼吸朝の空気を信じよう

ひたむきに生きておいらの日本海
息吸って吐いてなんとか生きている

大阪府 白 石 潔

陽炎の中からゆがんだ電車くる

ピヤガーデン開放感が満ちてくる

妻は留守 銭湯帰りの立呑屋

うたた寝の女房の汗拭いてやる

松原市 佐 藤 藤 子

無駄だとは思えど千羽の鶴を折る

作業着を洗う安らぎにある安堵

梅干を干せる日射しに感謝する

便利さに食事するのも疎ましい

岡山市 原 田 凡 太 郎

どん底に落ちて人間らしくなり

いさぎよく かぶとを脱いで老いの日々

生かされて生きてきたとは知らなんだ

新婚のようネと旅の老夫婦

鳥根県 松 本 文 子

風通す祭りばやしを聞くゆかた

朝露を踏みしめ孤独の朝が来る
ゆったりと雲が笑って通りすぎ
笑うことも泣くこともなく古い二人

羽曳野市 麻 野 幽 玄

電話で頼み委細手紙で念を押し
赴任地へ妻恋文のような文

幾度傷つけば気がつくお人好し

蜘蛛の巣を破って蜘蛛にみつめられ

尾鷲市 渡 辺 伊 津 志

素直さを少しずつ出す洒落た奴

離乳食の豆腐を食べる口が鳴り

恐ろしく忠実になる酒の酔い

結論は何か女房まだ駄弁り

岡山市 松 本 元 江

足跡のない生きざまの軽さかな

木の葉ひらひら青い想い出持って散る

踏み出した足のやり場に思案する

米子市 寺 沢 み ど 里

催促をした後味にせめられる

行列を逸れて気ままな蟻もあり

雨脚のはやさへ急ぐ迎え傘

西宮市 朝 山 千 世 子

油蟬女の業を責めるかに

軽井沢銀座もあって俗化する

ポートピア遠い孫呼ぶ夏休み

豊中市 満 伸 きく子
悪口を言うてる見る目がないんだワ

忙中閑あり 見ました天体ショー

孟蘭盆会ちよっぴりセンチになるわたし

松原市 本 多 洋 子

入口は冷房利かせて客を呼ぶ

ビル街へ祭り太鼓があたたかい

疲れてる主人に犬が歩を合わせ

大阪市 清 水 康 恵

身勝手な男が住んでる町を出る

足の裏今日も疲れた顔をする

無口でも父親らしく釘をさす

尼崎市 中 谷 利 美

わが道を行くに矢印などいらぬ

お喋りは佳境テレビをつけたまま

惜しまれて死ぬほど善根ほどこさず

和歌山市 坂 部 紀 久 子

お喋りが来てクーラーを強にする

ある日から突然蟬のけたたまし

あくせくと働く蜂見てる昼の月

大阪市 鈴 木 節 子

糸尻をしかと結んで老いたしか

受話器置く手のぬくもりがいとおしく

宿帳に旧姓を書く一人旅

兵庫県 円 増 貞 子

言いきればほらほら消える風の彩
裏からの往き来 気安くちらし
円満の秘訣 雑音聞き流し
神戸市 久 保 禎 三

年金の暇もて余しつつましく

芙美子の忌 月に火を噴く桜島

カンナ咲くスベイン城の牢屋に

花一杯運動そこにもお人好しがいる

浄土とは如何なるところぞ霊おくる

天国へノックしかけた妻も無事

涼み台寝ころんで見る夜の空

しみじみとよき友のありトマトうれ

いい気持 仕事の後の一休み

うとまれる自分に腹を立てておく

若い人は賢沢やなあと古もらう

粗大ゴミの捨て場か実家へ運び込む

年寄りが多いとお年寄りが言い

異人館笑わぬ巡查居て楽し

スクリューがヘドロかきませ昼の海

硝子戸へ蝶は自由をあきらめず

熊本市

高 野 宵 草

高 野 宵 草

高 野 宵 草

蚊取り線香静かに白き灰になる
しほむ身も知らず風船駈けのぼり

島根県 藤原 鈴江

早朝の散歩を天の恵みとも

老いたれど女を捨てぬ彩を撰る

流れ雲浮きつ沈みつ月およぐ

大阪市 西村 美佐女

夢みてる娘が微笑んで起しかね

ハブニングもなくて民芸のれん買う

願いごと無い若者も掌を合わせ

高槻市 田崎 あき子

一人ばち呟く金魚見ていたり

特急通過 炎暑の空気がき回し

水羊羹舌へ冷たき静かな夜

唐津市 久保 正敏

見も知らぬ神より馴染みの鬼に依る

背景にうごめくものが恐ろしい

待たす身に待つより辛いこともある

米子市 足立 由美子

旅に出た姑がくれた開放感

医者顔半分もったインスターン

口答えばかり見事に成長し

尾道市 八木 秀水

自尊心 好きだと言えば傷つくか
振り向けば誰もうしろに続かない

ご先祖の墓 息子らが洗ってる

大和高田市 岸本 豊平次

背伸びしたローンの長さにくたびれる

人生はどこかに抜ける穴がある

洗濯を星空に干す共稼ぎ

米子市 野坂 なみ

民宿のふれあい故郷の老母惚び

裸婦の絵へ少し妬いてる女の眼

生かされた余生 素直な色に染め

唐津市 浜本 義美

神妙にせよと鰻の釘を打ち

秋の彩忘れた筈の人憶う

近道を知らぬ男で靴が減り

羽曳野市 佐野 白水

田畑があるから過疎の村で老い

宵山は歩き巡行はホテルで見

二条城の広さ室内電話ほしかろう

兵庫県 野々口 ゆう也

夫婦の絵濃淡の彩出し合うて

軋む椅子エリートコースずれた音

老いの朝好きに走って軽い箸

倉吉市 今村 夕路

救いなど求めぬ野犬背を向け

妥結する空気互いに笑顔見せ
シャボン玉空気にふれて消えてゆく

八尾市 宮崎 シマ子
扇風機どちら様へも顔をたて
退屈しお隣の子とジャンケンポン

手を休めたまには廻りを見てごらん

青森県 岩淵 一星

山菜と川魚に左遷いたわられ

あまりよく似ている孫ではめかねる

ヘルメットみんな並んで飯場暮れ

浜田市 中川 幸一

何もかも高いと思う安月給

叱言だけ言える程度に軽く病み

憂うつな日に生憎の碧い空

唐津市 田口 虹汀

ビルに住むただそれ丈の金魚鉢

内幕が見え一人減り二人減り

べた惚れの役に内幕など見えぬ

旭川市 朝倉 大柏

登場人物善人ばかりで眠くなり

あきらめて優しい言葉母に選る

傷ついて男の賭けがふくらまる

大阪市 山本 炬斉

青信号待ってる人の傘と汗

夏祭 裏方さんは汗だくで

ほどほどと言うと隠居くさくなる
西条市 片上 明水

網の口括げてからは雑魚ばかり
風船の紐を子が持ち親が持ち
判を押す明日の立場が揺ぎそう

兵庫県 奥野 テル

夏草の薬草だけを姑は摘み

責任を果して冷たい人となる

老いひとり古びた箆筒と語る日も

青森県 波 ただお

角とれるどころか我慾強くなり

お祭りの寄付へちよつとの見栄もつけ

天も地も割れるが如き夏祭り

唐津市 仁部 四郎

日程は現地のガイド告示する(中国旅行)

メルシーもダンケもあります友誼店

九条の範囲八月ごとにずれ

大阪市 大野 武太

人生を歌う明るい色を撰る

中年の神父さんもいた夜学

蓮ひらく音は心の中できく

唐津市 木塚 素石

経験が言わせる人のにくい顔

人はいふ世界が違ふと逃げ言葉

太い尻はめられているプロ野球

母に似る野仏温い肌ざわり
今治市 新居田 胡顔子

仏にも鬼にもなれず住む凡夫
豊かさの死角に陥ちた少女の死

島根県 岩佐富子

逝く夏をしきりに惜しむ蟬しぐれ

虫の声聞いてお月さん山へ去ぬ

孫いとし ちんまり座った膝小僧

寝屋川市 立床晴風

左遷地に我が人生の腰すえる

危なっかしい手付きで名刀手入れする

唐津市 浜本久仁於

対決の構えて蟹の横しざり

母さんを寄ってたかって派手にする

山口県 高崎喜一

玄関を入れれば女房の声になり

夏休みの宿題父母でゆずり合う

弘前市 田中叶

ぶどうの実だんだんまるい月となる

或る日の妻起きて来る気のない女

大阪市 朝倉利義

おみこしワッショイ塾の窓開かず

干し物を両手に妻のサングラス

東大阪市 阪本喜洸

その都度の喜怒哀楽で酒の味

泡の数ふえたと娘のお茶をのむ

交野市 山本テルミ

世のうつり無言で語る遍路道

ローソクをつけると仏様もたのしそ

東子市 小山悠泉

美しい虹を残して通り雨

子を味方に妻が反旗をひるがえし

泉佐野市 真崎浪速子

汗が待つ清濁併せ飲むビール

泣顔という切り札のある女

八戸市 島田昭治

土壇場になって人間仮面とる

顔よりも心の化粧むずかしく

八尾市 山下みつる

勘忍の緒を切る時期を見失い

役終えて趣味一筋の道たのし

浜田市 佐々木裕

秋茄子に嫁はせつせと水をやり

打ち水で古いのれんを守る店

西宮市 山田喜代子

おふくろのばやいてるうちは達者なり

孫三人それぞれの顔で泣き

大阪市 堀口欣一

今日は一日しやべらぬことにする

内職に汚れた指を持つ夫婦

吹田市 西川景子

おいしいか おいしいやろと木木へ水

姑さんの人生観が好きと嫁

鳥取県 加藤茶人

真白に洗う幸せ妻のもの
一年の縮図 浴衣に見る育ち

島根県

岩田三和

平凡に退職したと胸を張り
年寄りが退屈もせず店番す

鳴門市

八木芳水

いろいろな命養う広葉樹
ふるいから落ちた細砂の使い道

大阪府

山田松太朗

半袖の成人式は頼もしい
西瓜ばかり ああ年金の有難さ

松江府

豊田巡歩

老齡化 階段ばかり増える都市
ほどほどにしとけを女気にさわり

大阪府

田中亜弥

耐えてゆく私に長いながい坂
聞き違いだったシヨックに出る笑顔

岡山県

池田半仙

易の灯へジーパンの娘も寄って来る
会長の腰の低さで和を保ち

米子市

鍛原千里

みな留守の朝寝、天井睨めっこ
長生きはしたくなしせて八十まで

泉佐野市

大工静子

造花にも似合う花びんがあるものを
つまりいた石の痛さが分る齡

大阪府

西本保夫

乗る人も少なく駄の蟬しぐれ
孫が来る金魚鉢など縁の下

高知県

山下登舟

囑託のため息ここには無い権限
囑託の進言独りの時は聞く

榎原市

中辻千子

恨めしや二十パーセントの雨宿り
山裾を裂いてバイパス今日も伸び

唐津市

桑原掬治

他人の痛み感じる子であつて欲し
墓掃除に行く子と軽い母の足

尼崎市

愛知県

つくばえに雀の姉妹水遊び
クローラーのひる寝へ蒲団掛けてやる

岸和田市

吉水照江

盆踊り夜目にも高い嫁の鼻
中年の集い名譽と肩書と

岡山市

串田句味地

味方の猛攻終る弁当開ける
先生も生徒と同じように焦げ

今治市

八塚三五島

老いの眼が百日紅の緋に惹かれ
六十五年馬合わせ合つて共に老い

和泉市

岡井やすお

急用が勝逃げさせるマージャン屋

核実験 潮時とみて原爆忌

新潟県 高野不二

コップ酒女房相手に急ピッチ

肥つてゐる事まで医者にあやまつて

熊本市 北川一進

居合せたばかりに刑事つきまとい

昼寝もういびきかいてる日曜日

鳥取市 武田帆雀

御札には過分な物をする事情

故郷の兄羽振りを利用す水の音

境港市 細木歳栄

ユニークと我が家をほめる嫁がいる

ねむの木で色彩豊かな児が育ち(ねむの木学園)

東大阪市 三宅哲夫

貧乏に追い回されて年とれぬ

兵庫県 藤原捷一

夕立に葉うらを見せる風があり

大阪市 村島秀村

ソーダ水 泡立ちきえて男のむ

奈良県 宮川古都路

優越感の羽を広げてくじやくいる

大阪市 新谷春吉

あれ買うてこれ買うてが寝てしまい

■訂正 9月号水煙抄(P32)

今日を思い明日を思つて米を研ぐ(奥山美智子)

56年度二賞発表句会と

同人総会

日時 昭和56年10月4日(日) 午後一時開場

会場 なにわ会館—大阪市天王寺区石ヶ辻町三八—

(近鉄上本町六丁目から徒歩三分)

電話06・722・1441(大代表)

▼同人総会は午後2時〜3時30分。

▼司会・西田柳安子/開会の辞・川村好郎/挨拶・西

尾 栗(議事)①会計報告・若本多久志 ②事業経

過報告・西尾 栗 ③質疑応答/閉会の辞・黒川紫香

懇親宴 同会場で4時〜5時(会費三千元) 同人以外の

方のご出席歓迎

▼二賞発表句会 午後5時50分から

おはなし 西尾 栗

路郎賞・川柳塔賞表彰

兼題 「直感」 高杉 鬼遊 選

「歯」 野村 太茂津 選

「返事」 黒川 紫香 選

「女神」 川村 好郎 選

席題 当日二題(各題三句以内)

会費 五百円

川柳塔社

愛染帖

橘高薫風選

青森市 工藤 甲吉
 青森市 青森市
 りんどうの花紫に亡妻の秋
 薄気味の悪い綱引き西・東
 倉敷市 水粉 千翁
 生々流転一片のいのち知る
 孫ですと千翁さんは若返り
 鳥取市 河村 日満
 北方領土を囲んで海よ吼えたてよ
 藤波翁逝くや短詩の鬼のまま
 富田林市 岩 田 美 代
 弾む日も沈む日もなし炎天や
 なんとなくこうなつて来た葉びん
 和歌山市 松 原 寿 子
 八月の襲にさよなら彫つておく
 ひとしきり雨にうたれて見るもよし
 米子市 八 木 千 代
 透明な迷いに堕ちて脱け切れぬ
 流れ星お前は何を失くしたの
 高知市 西 川 富 恵
 硝子絵の少女が不意に炎を投げる
 幻の舟に乗り込む二人かな

和歌山市 西山 幸
 今日之苦は終れり赤い鏡掛け
 仮面脱げば泣き顔涙顔になる
 神戸市 久 保 禎 三
 連れ立ちの墓参一家に母を見ず
 荒縄で少女犬曳くキャンブ村
 鳥根県 小 砂 白 江
 進む時計遅れる時計刺しちがえ
 カワセミの斜めに落ちる水が澄み
 平田市 久 家 代 仕 男
 教科書の改竄紙魚に当て星のダム
 天の川のぼりつめれば星のダム
 浜田市 中 川 幸 一
 自画像が曖昧模糊と描けない
 その先は知らぬスルスル導火線
 鳥屋川市 江 口 度
 タクシーで来た奴ばかり遅刻する
 私心なし飛んで来ました青い鳥
 京都市 山 本 桐 下
 一步二歩退いて綺麗に宛名書く
 作戦の水はストレートには飲まぬ
 岡山県 池 田 半 仙
 音ばかり雷暑さ置いて去に
 雲の峰天下を取った気にさせる
 尾崎市 黒 川 紫 香
 天馬かな白い夏雲よく走る
 電柱に登つてみたい熱帯夜
 兵庫県 遠 山 可 住
 夢を持つ虫が一匹月へ発ち
 愛秘めた手紙そのまま詩になり
 兵庫県 辻 文 平

嘘一つわかつて伏せる洗面器
 花結び見つめてはじき妻に会う
 鳥根県 榑 原 秀 子
 海猫の親子旅立つ鳥の朝
 自らを律し奈落の底にいる
 今治市 矢 野 佳 雲
 硬貨ちやらちや言葉が多すぎる
 喰いかねる時は情熱もつていた
 羽曳野市 麻 野 幽 玄
 肌着のおしゃれが楽しい歳となり
 手鞠唄程に弾まぬ孫の鞠
 旭川市 朝 倉 大 柏
 甘い夢持たぬ地下足袋しかと履く
 ホロホロの人形核を告発す
 大阪市 川 口 弘 生
 極楽のお池で泡が一つ浮き
 大阪市 北 勝 美
 終戦記念日握りこぶしほとうに解け
 高槻市 田 崎 あ き 子
 冷房を砦のようにして読書
 今治市 月 原 宵 明
 妻すこしふとり平和が保たれる
 笠岡市 木 山 遠 二
 神様を罰が当ってから拌む
 大阪府 坂 口 公 子
 神様の叱咤は四百四病かな
 青森県 五十 嵐 操 史
 先走る姿勢のまんま民に落ち
 大阪市 大 野 武 太
 本筋が少しずれてる面白さ
 米子市 青 戸 田 鶴

帯きりり結びほとけの灯をともす

松江市 舟木 与根一

山彦がきれいで此処も過疎と知る

兵庫県 野々口 ゆう也

老婆と鳴らない鈴も時に振り

島根県 大野 酔夢

履歴書は無学の汗をみてくれず

唐津市 仁部 四郎

診察券名前元気に書かれてる

唐津市 新岡 回天子

冗談を言つて気軽に医者帰り

堺市 高橋 千万子

海辺のロマン日焼けと共に消え

藤井寺市 児島 与呂志

吊り皮が揺れて冷めたい目を感じ

和泉市 西岡 洛醉

蟬時雨浄土の母の声を聞く

大阪市 朝倉 利義

中性子爆弾長崎の鐘も空し

高槻市 若柳 潮花

地獄までゆきそうだから金を溜め

和歌山市 若宮 武雄

黒揚羽とカンナの恋が燃える夏

京都市 都倉 求芽

鬼灯が揺れてたそがれを滲ませる

岡山市 川端 柳子

一日をいい日で過す数え唄

青森県 岩淵 一星

カルピスのウインクをした味でなし

倉敷市 藤井 春日

好き嫌い言うてちや芸者つとまらぬ

西宮市 野呂 鶴汀

水中花女独りの住居なり

鳥取市 武田 帆雀

負け犬にちよつと嬉し口笛で

寝屋川市 柴田 英王子

コメディなタツチで決る夫婦愛

松江市 豊田 巡歩

親類が広く兎も亀も居る

羽曳野市 塩満 敏

昔昔玉は鬼がもつていた

和歌山市 福本 英子

千年の睨みが朽る阿吽像

大阪市 江城 修史

夜の雨その冷たさにある記憶

唐津市 浜本 義美

ペーロンの囃子に蟹も拍子とり

浜田市 佐々木 裕

蒲卵コトコト今朝は秋の風

豊中市 満仲 きく子

ブランコの軋る音して夜の秋

東中市 小山 悠泉

地図にない小さな山がある故郷

米子市 雑賀 美世

民宿の土塀が由緒偲はせる

大阪市 中西 兼治郎

素人か玄人か鋸の音できき

今治市 八塚 三五島

女降りた席に女が来て居る

大阪市 神夏 磯道子

泥棒もガラスの家に入られず

米子市 田中 亜弥

喜びを一つのしわに刻みこみ

兵庫県 奥野 テル

金婚の賀にも厳しい夢の跡

岡山県 松本 元江

どの色もきれいに見える虹の橋

鹿野市 坪田 冬花

盆の歌この子も父の血がながれ

岡山市 串田 句味地

百日紅の緋に魅せられて気が若し

大阪市 杉本 智恵子

夾竹桃幼なき頃の夏の花

大阪市 白石 潔

雲の峰兵の想い出奇酷すぎ

堺市 伏見 茂美

母と妻さて軍配はどう上げよ

寝屋川市 宮尾 あいき

香煙が包むと善女の顔になり

高知県 山下 登舟

ロッキード嘘でてこずる裁判所

唐津市 山下 勝一

パン食うて米価値上げに抵抗し

島根県 木村 はじめ

過疎の村山よし川よし人もよし

高知県 赤川 菊野

遠い日の亡夫と歩いた夜店の灯

松原市 本多 洋子

醜と悪まとうな老いの字が悲し

守口市 羽原 静歩

仰ぎ見る銀河は恋の軌跡かな

大阪市 清水 健司

いのちある釘を打ちたいから昼寝

今治市

越智 一水

嘘がない

七十を越えた書体に

倉吉市

奥谷 弘朗

根回しがたらず足元危ぶまれ

島根県

堀江 芳子

バランスを保つ一言妻が添え

島根県

堀江 正朗

ここからはライブルとなる差し向い

鳥取市

北野 天人

介添えの目盗んだ試歩に一人笑む

岡山県

荻野 蛟虎狼

近代化線路の唄は聞えない

岡山県

稲岡 正之

極秘までみんな吸いとする盗聴器

松山市

谷 真風

葬いの他家の花輪に取り巻かれ

宝塚市

吉田 笑女

これしきと思うにまかせぬ老いの足

西宮市

朝山 千世子

愚痴言う娘言わぬ娘母はみんな分ってる

河内長野市

井上 喜醉

忘却へ道頓堀の灯が憎い

大田市

藤田 軒太楼

妻の酌沈む心にじんと沁み

尼崎市

奥山 美智子

こんなにも言葉が隠れていた辞書

東大阪市

三宅 哲夫

便利だが持て余しているのは車

岸和田市

原 さとよ子

風診のおかけ嫁にも休暇でき

熊本市

高野 宵草

寄生木と仲よく生活す樹のゆとり

唐津市

桑原 掬治

孫つれた娘と語る夜うるわし

唐津市

岩崎 実

積み立ての満期の金に羽が生え

東大阪市

斎藤 三十四

七十が阿呆踊りの輪にはいり

米子市

野坂 なみ

上役に残業させて反旗振り

和泉市

岡井 やすお

燃え尽きた蚊取線香渦を巻く

兵庫県

森脇 和子

過去の愚痴捨てた姑の幼な顔

吹田市

西川 景子

にわか雨ばたばた直径四センチ

岡山市

原田 凡太郎

手話落語耳遠い子へ汗をふき

東大阪市

市場 没食子

難民へ狭い日本が土地も割き

岡山市

井上 柳五郎

あの気性堪えに堪えてる背に見え

鳥取県

羽津川 公乃

傷ついた心にまあるい石を積み

羽咋市

三宅 ろ亭

目減りした通帖時には放つとかれ

今治市

新居田 胡頹子

無医村へ捨て石となるUターン

堺市

田辺 哲寿

業を消す遍路姿の旅の空

出雲市

板垣 夢酔

満月を恋した寡婦の乳房張る

山口県

高崎 喜一

信仰のなく観光地の寺参り

唐津市

田口 虹江

荒れ狂う風にも風の道があり

大阪市

藤森 小雅子

善人の影秋風へ話しかけ

仙台市

川村 映輝

CMの上には泡がよく出ない

岸和田市

清野 こう

招かざる客来て汚がす海と山

貝塚市

行天 千代

親に子を預けて二人飲みに行き

富田林市

中村 優

熟年に遠い臉の子守唄

★

豊中市中桜塚三丁目13-15

桶高薫風(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題「酒」 選者 桶高薫風

締切 10月10日

(ハガキに三句以内)

投句先

大阪市東区馬場町6-4NHK

大阪放送局(老後をたのしく)係

発表

10月31日(土)ラジオ第一放送

午前9時15分から



公園。高い世界一高い
レーン。の見えるは
トール。のポール。

関係者各位が私達をやさしく激励していただき、その使命がよくなりました。

七月十九日13時、大阪国際空港到着。18時30分成田発、アメリカのシアトルへ、途中、日付変更線通過(時差16時間の遅れあり)飛行時間8時間30分の後、11時シアトル着、14時9分バンクーバー着十九日より二十二日迄ホテル・センチュリープラザに宿泊。

七月二十日、バンクーバー市役所を表敬訪問、終って市の施設のリハビリテーションを見学、続いてスタンレー公園、クイーンエリザベス公園等を散策、大橋巨泉の経営するギフトショップを訪問、夕食は中華料理を楽しんだ。

七月二十一日、ピクトリア観光、ブッチャードガーデンでは右に左に咲き乱れる花を觀賞し、昼食はバイキング、夕食はステーキパーティーを楽しんだ。

フリーウェイ走るトヨタの車かな
午前二時バンクーバーは獣めき
女とは魔性に似た脚線美
トラベルチェック七百ドルのあて姿

スナックもバイキングというお国柄
七月二十二日、ホテルからバスでニューウエストミンスターシティに行く。市長は不在で市会議長の方と市長秘書に手厚い歓迎を受ける。早速守口市からスタンド付の華麗な羽

カナダ・アメリカ飛び歩き

羽原 静歩

一九八一年は国際障害者年と銘うって各地にいろいろの行事が多い。私達の住んでいる守口市でも、この一年をなんとか意義ある年にしようと念願していたが、とうとうその願いが夢ではなく現実の姿となった。

七月十八日に身体障害者を中心十三名の方々が守口市の姉妹都市であるカナダのニューウエストミンスターシティを訪問し、その親善を深めるといふ行事に参加するための壮行会を開いた。木崎市長、助役をはじめとし

子板と扇子を贈った。その瞬間カメラのシャッターがパチパチ鳴った。終って小生から菓子一折と扇子十本及び川柳の短冊(英訳付)を贈呈した。

参考までに掲げると

Japanese Senryu

The shortest poem in the world
神やびてカナダの山に声ひびく

What a splendid and grand view of the
Canadian Rockies!

Now, My heart is too full for words

July 19, 1981 Seiho Habara.

translated by Yasuo Habara.

七月二十三日、12時ウエストバンクーバー発、14時34分ロスアンゼルス到着リトル東京、オルベラ街、チャイニーズシアター等を見学した。七月二十三日と二十四日の二日間、ホテル・ニュー大谷に宿泊。

七月二十四日、終日デイズニール観光九年前のデイズニールランドの観光を懐かし思い出した。テレビの司会者玉置宏氏に会う。これはこれはデイズニールの六角時計かな

デイズニールの短き夏の小半時

七月二十五日、8時15分ロスアンゼルス発10時30分シアトル着。13時15分シアトル発、機中泊、日付変更線を通過。

七月二十六日、15時成田着、飛行時間9時間45分、乗り継ぎにて20時大阪空港着。

むし暑い日本へ帰るホットする
乗り継ぎへサンドウィッチを食べている



嗚呼 佐伯越子様

林 瑞 枝

八月九日の日曜日、久し振りにゆつたりとした真夏の休日、私は何故か眠くてたまらなかつた。弟が海で亡くなった日もこんなに眠い日だったので私は或る不吉な予感におのいていた。やはり午後三時、医大病院で越子さんが息をひきとられたとの訃報に接した。あまりの現実には血の引く思いで、歩けばつんのめりそうて畳の上に暫く涙も出ないまま震えていた。

越子さんとのご交誼は昭和三十年頃から始まった。可愛らしい京人形のようなお嬢ちゃ

んと坊やを連れ、ほっそりと色白のいつも微笑を湛えた奥さんが裏隣家にいらつしやることを知り一目で好きになった。省れば今日まで二十六年間、お顔を合わせない日はない親しさで出入りをさせて頂き、きやらばく川柳会として発足して以来、越子様は私どもの会になくはならない秘蔵っ子でした。歴史にも地理にも明るい、頭の回転の速い越子様

に旅行のスケジュールは特にお任せで、私共の重い腰を叩く役目をテキパキと引き受けて川柳の新年会、忘年会、メンバーの中から受賞者が生れば、その祝賀会等、会の段取りへ骨身を惜しまぬ才覚の人でした。今にして最後の会となった越子様御自身の全日本川柳大会受賞祝賀句会は、大変な御尽力により華麗に幕を閉じたのでした。か弱い女性の身へご無理な御負担をおかけして、どっとお疲れが出たのではないかしらと自責の念を禁じ得ません。

六月に一時退院をなさった際、枕元に五冊の新刊書を置いてお読みの風でした。「あんたホントに感心ね、病床でも本を離さないなんて」と申しましたら「病気のこと考え出したら夜叉になりそうて本が私の救いのよ」とおっしゃった。それから間もなく再入院され、今度こそすっかり快くなって御退院を、

とお祈りしていただきましたのに面会謝絶が続き、お見舞いに行けないまま御全快の朗報もあえなく、現代医学にも見離され遂に不帰の人となつておしまいになった。

越子様の明るい性格からにじみ出る、あのほんわかとしたソプラノの「御免下さい、奥さま、いらつしやるかしら」と言う春風のようなさえずりは、もう聞かれないと思うと何と花の生命は短くて無常なものよと思ひ知らされ、空を仰げば白い夏雲の流れに天女のような越子様の舞い姿が浮んで夢のようです。面影は永久に胸に生き続け、残された私達は手をとり合つて川柳への灯を枯らさぬようマイペースで気永に続けたいと思います。どうかお守り下さいませ。

柳友逝きて天も情ある涙雨

トツプレディー秋を待たずにカンナ散る

越子さん

それでも待っていて

八 木 千 代

白柳先生のとくもそうだった。若人先生のとくも。もうもう神さま、こんなつらい別れ

は許して下さい。もう何をする気もしないなどと沈みこんだ。それなのにいつの間にか傷口を被う膜も薄くても張ってきている。そんな自分をびっくりして、それでも生きています。そして今度、孟蘭盆会も間近い八月九日、親しい大切な友を失った。どうして? どうしてなの? と、また神さまに駄々をこねているうちに、折角被っていた膜もみんな剥がれて、古い傷口も一緒に痛み出す。

川柳以外の趣味でも旅のときも、いつも隣にいて気を配りつつづけてくれたひと、性格は両極のように違いながら、姉のように母のようにも年上の私を大事に庇ってくれたひと。

新同人紹介

岡 田 ぶ み

— 鬼遊・右近・三十四・弘生推薦

森 田 熊 生

— 栗・日満・由多香推薦

もし共通の結びめがあったとしたなら、それは火なのかも知れない。豊頼で冗談好きで明るい反面、鋭くて計画性があった頭の回転が早く、激情家で、まさに燃えさかる火のようだった越子さんにくらべ、私は火種ていどのお粗末な火だけど、長所も欠点も知り尽しの長い間の近い近い友情であった。

御家族の献身的な看護に感えて、つらい病いを耐えて、「絶望と不安とがすかな期待の繰返しだけど、も一度歩けるようになって見せる」と、あの言葉を思い出して、また泣いてしまふ。こうしてまた私は、父へ母へ夫へ、師や友へと、白い花を手向けながら、気の遠くなるような残り旅を行くのだろうか。

そうだ、越子さんは赤い花が好きだった。いろとりどりの小花を瓶に入れて、最後の別れるとき、越ちゃん待っててね」と、やつとそれだけ言ったけど、「どうせ回り道しながら来るんでしょ」と言い返されるような口もどだった。それでも待っていて下さいね、越子さん。もう先のことなど私には判らないもの。安らかに眠り下さい佐伯越子さん。

散りぎわの臉にきつとあの絵巻

堺まつり協賛

第35回堺市民川柳の会

とき 昭和56年11月1日(日) 12時
ところ 堺労働セツツルメント
(阪堺線大小路下車西へ30米
三井銀行うら)

講演 「寛容と究極」 片岡つとむ氏
宿題 「伴奏」 河内 天笑選
「異性」 森中由美子選

「壺」 墨 作二郎選
「駅」 橘高 薫風選
「英雄」 梶川雄次郎選
「方角」 竹山 逸郎選
「芸」 西尾 冥選

席題 一題(当日発表)
切 13時30分(各題二句)
☆欠席投句は拝辞

会費 五〇〇円(作品集・記念品呈)
賞 各題秀句に呈賞

主催 堺番傘川柳会・堺川柳会
後援 堺市文化団体連絡協議会
堺文化観光協会

柳界展望

(原稿締切毎月末)

集録・香川酔々

■去る7月19日、呉市大空山公園平和の庭に、「平和の碑」の除幕式が行なわれた。参列者呉市長をはじめ300余名の盛大な式であった。

■第5回豊橋市民川柳大会が、10月25日正午より豊橋市民文化会館で開催予定。兼題「ピエロ、活字、頼い、武器(各3句)主催「豊橋市、豊橋番傘川柳会。投句者は、切手300円、10月20日まで下440豊橋市高師町字水神29の13鈴木如仙あて。■呉市大空公園平和の碑建立記念第15回串かつ川柳大会が次の要領で開催。時・10月25日(日)am10時 所・呉市中央福祉会館5F 特別課題・平和(2句) 宿題・生きる、抜く、やる 気、肩、車。

表彰・総合20位まで。 会費・一、五〇〇円(投句参加者は、切手七〇〇円。10月15日まで) 投句先・下35呉市本通4-6-7串かつ川柳会中津泰人。 主催・呉番傘川柳会、串かつ川柳会。

■川柳評論誌海国No.8で、「川柳名称への疑念と対策」の特集を行なっている。編集者山村祐氏で、転載玉稿抄集に、麻生路郎の窓口談義がある。

■柳誌「愛吟」では、友誌拝見のコーナーを設け會員の作句目標としている。第8号には、塔よて、おぼあちゃんと呼ばれて妻はふり向かず 好郎。頃は佳し柱馬の跳ねるタイムミング 酔々。疑問まだ解けず一つの音に座す 正則。などの作品が記載されている。編集発行人は岩田三和氏。発行所下92-04島根県能義郡広瀬町広瀬399広瀬川柳愛吟会

■合同句集「あすなろ」発刊記念 第十回 北陸小松川柳大会 とき・昭和56年10月4日(日)10時

ところ・小松市小馬出町小松市公会堂 席題(当日発表、共選) 1. 金 沢 片岡 健治選 富山 松岡 緑朗選 2. 金 沢 福村今日志選 羽 崎 河崎幸太樓選 3. 辰 酒井 路太樓選 金 沢 奥 美瓜路選 宿題

三味線 井川 紋弥選 読 逸見 蘭川選 灯 西村 芳治選 門 墨 作二郎選 斬る 山田加勢夫選 野 橋高 薫風選 (席題、宿題共に2句) 会費・1、000円 (当日不参加者の投句は受付られませぬ)

主催・こまつ川柳社 ■東大阪川柳同好会は、この8月句会で満十年を迎えた。初代会長竹中肖二氏はすでに幽明境を異にされたが、二代会長桑原喜風氏を中心に、斉藤三十四、那須鎮彦氏等人材集い、着々と発展の歩を進められているのは、御同慶の至りである。 ■川柳御所慶では、300号記念誌上川柳大会を左記の要領で開催される。

課題・「心」玉野可川人・亀山恭太選、「旗」堀豊次・片岡つとむ選、「ゼロ」森中恵美子・山崎文義選 参加費・五〇〇円(小為替または現金) 締切・10月15日必着 用紙・タテ23cmヨコ4cmの句箋に一枚一句。各題3句一題を二人の共通選ですのて同一句を二枚ずつ書くこと。全部で18枚になる。無記名。封筒には住所、氏名を明記すること。 発表・御所柳12月号 贈呈

投句先・〒615京都市右京区西院春栄町27 京都番傘川柳会

▽同人・柳友消息△ ■尼緑之助氏(出雲市)畧 在住の同人17名集合して、川柳普及の方向を検討された由である。

▼藤村青一氏、山下登舟氏他多数の方々より、本社へ暑中御見舞のお便り拝受。 ▼羽原静歩氏(守口市)アメリカ西部都市を巡回。お便りをデイズニールランドより本社へ。 ▼路郎賞準賞第一席の野田素身郎氏(倉敷市)七月に肺腫瘍の手術され、目下入院中。十月の表彰句会には出席できず残念と。一日も早い御快癒をお祈りします

▽句会案内△ ■南大阪川柳会 時・10月19日(月)夕6時 場所・高松会館(環状線寺田町裏駅下車東百米) 兼題「時、当番、トータル、通す、豆腐」

■駒つなぎ句会 時・10月26日(月)夕6時 場所・高松会館 兼題「筋書、郊外、口下手、風向き」 ■堺川柳会 時・10月15日(木)夕6時 場所・堺市民会館(南海堺東駅下車歩10分) 兼題「ロソク、両手、びんせん、船」

山内静水家族八人句集

「おかげさま」

板尾岳人

豪華絢爛たる山内静水家族八人句集「おかげさま」が、ときに九月六日、竹原川柳会創立25周年記念大会にて、二〇〇余名の参加者を得て上梓された。

添加物のない句集、出来栄えは誠に見事なものである。やがて各地から最大級の称賛がおくられることだろうが、わたしは太鼓の音をはじめとする音の世界の一部として、こゝばあり、詩があり、川柳があると、句集「おかげさま」を読んでさまざま考えた。

下積みへハイと答える妻のいて 静水
 はは逝きて百日草はいま盛り " "
 子に詫びる心、三日定まらず " "
 平凡な夫婦で人に羨まれ " "
 その上に父の日などありがたし " "

妻への喜び。亡母への愛。子の思い。夫婦の愛情。そして自己への喜び。その好奇心と摂取力は旺盛で、しかも対象への深い愛と尊

敬に満ちあふれている、そして静水氏の肥沃な語りの世界に言葉と川柳は連続し、相互に浸透しあつてわれわれの心を打つものがある。

父ちゃんは徹夜雨風ひどくなる 房子
 子らは何食べてるだろう宿の膳 " "
 もう少し背丈がほしい作業台 " "
 わたしにも覚えがあつてきいてあげ " "

愛情と思想とによつて結ばれた山内静水・房子夫妻、房子夫人の句は追憶や後悔にとらわれることなく、たえず新しい詩の中に飛びこんでいこうとする。言いかえれば八方破れに近いその姿は、きちんとしていて魅力的であり、お互いに夫や子に独特な鏡を差し出しているようで、さわやかでもある。そして他人を包み込む人間味、太陽のような情熱を家族のために注ぎ込む連帯感が匂う。

長男 静火
 戦争は死だひめゆりの塔に伏す
 長男妻 富喜恵
 姉ちゃんを追う遠い道のきかん顔
 二男 静雨
 包丁をたてて一日無事おわる
 二男妻 三枝子
 あれこれと持たせてくれる母が出来

二女 敏恵
 工場であく母の手がふくれ

三女 久子
 空びんの工夫で出来たおひなさま

家族のスケッチがあり、いずれもリアルであるとともにすがすがしい。それが静水氏の川柳へのよせる流露していて忘れたい現代を生きて来た静水氏の存在を感じさせる一冊である。

簡潔重厚に表現した静水氏の詩風が感じられるが、その背後にはきわめて強烈な主観が内包されていて、竹原川柳の道にうちこんでおられる姿は偉とすべきで、観照の確かさ、深さのみえる作品群は川柳人のすぐれた証言として読みつづけられることだろう。ややもすると(わたしも含めて)人の虚を衝く作品が珍重されるような傾向があるとき静水氏の簡潔重厚なオードソックスな作風は貴重なものである。今後ますます詩風に清澄さを加えていかれることをお祈り申し上げます。

大阪弁へ飲めないはずの妻が受け 静水
 スプーンは曲げぬが超能力の妻 " "
 よく人が来る日と思う妻の留守 " "
 ふり向けばつかず離れず妻のいて " "
 だまされてあげるとみなまで聞かぬ妻 " "

訂正 9月号水煙抄、古田比呂子さんの句
 夕立がなにやら私をせきたてる

先 手

本多清人選

先手打ち無理な注文つける国
下手どうし下手が先手と譲り合う
これだけは先手が効かぬ宝くじ
特ダネへ社旗へんぼんと先手うつ
トイレからブランを練っていた先手
カタログへ粗品を添えてきた先手
磯釣は先手必勝場所を選ぶ
負け犬に先手が欲しい日が続く
先手打つその裏側で罫が待つ
おもちゃ屋で孫に先手を取られたり
先手取りながら後半負けいくさ
そのうちに勝機がつかめてくる先手
年金の暮しと先手で逃げられる
歩一つびしやりと打って先手とり
ドアに耳あてて先手が居た取材
為にする噂へ先手打つ辞任
席先手先ず落着けると胸をなで
先手打つ女将の気転に救われて
先手打つ商いアイデア秘策練る
すんなりと先手渡した日の悟り
やつと得た先手で痛いボカを打ち
先手打つ嫁の気転に輪をつなく

先手とられた悔いいつまでも残せない
運命に先手打たれてばかりいる
何時先手取るかチャンスを見うめ
流石なり策士先手を打つて出る
人生を悟り先手を欲しがらず
先買いの早手廻しが利に乗らず
ゆずり合う先手に企みもつて出る
その先を読まれて先手慌て出る
着々と先手油断が忍びよる
先手後手労わり合うて夫婦像
先手とる尖兵として盗聴器
定石をはずし先手をあわてさせ

美穂 凡太郎 七面山 可住 軒太楼
浪速子 悠泉 ひで カズエ
みんなまで言わせず先手打つ返事
ライバルに先手取らせてやるゆとり
先手とる虚栄心を女持ち
先手取る策に溺れた日の落日
耐えてきた掌に握られている先手
ライバルの先手先手へ湧く闘志
辻褄を先手とられる話し下手
ライバルに先手取られた日の焦り
裏の裏まだその裏をゆく先手

粗 品

川崎秋女選

聊かの粗品で肩の荷を下ろし
にんげんの百面相を見る粗品
独り者粗品のようにごろ寝する
ごぶさたの言訳添えて粗品くる
後始末頼む粗品がやって来る
好物をちゃんと覚えていた粗品
本当に粗品で口が塞がらず
その心透けて見えてる粗品来る

句味地 刀水 勝一 久仁於 浪速子 与根一 七面山 七面山 七面山 七面山 七面山 七面山
ひで 浪速子 悠泉 ひで カズエ 芳子 久仁於 はじめ

裏のある名刺代りの粗品来る
慰斗紙を替えて粗品は回される
氏名だけ秘書が知らせて来る粗品
百万円包んで粗品と書く怖さ
粗品と言う賄賂は軽く受取られ
上中下粗品の中にあるランク
役人に届く粗品は豪華です
粗品でも百万円なり医学界
寸志ではおかし粗品として贈る
どうしても粗品に見えぬのも交り
粗品とは言えない中身だつてある
粗品ではないと中味の不機嫌さ
贈られる粗品の理由は伏せておく
達筆に粗品と書いた墨匂う
贈賄の匂い粗品がでつか過ぎ

嫁きおくれ顔に粗品と貼つてある
よく動く母で粗品のようになされ
幾重にも包まれ粗品顔を出し
日本の美德粗品と書いておく
粗品貫いに来たデパートでお辞儀され
妻の手で粗品が生きている炊事
紫の襖紗に粗品包み込み
粗品の底で賄賂の札束目をさまし

住

美しい粗品少女が縫い上げる
大臣と庶民粗品のけた違い
粗品ではないと中味がつぶやいた
達筆で粗品と書いている打算
どこまでが粗品私に分らない

人

役立って来いと粗品に言い聞かせ

粗品一つ女心をくすぐられ

地

粗品とはどちらも思つてない包み

軸

粗品進呈あの人何にも買わず去に

泡

荻野 鮫虎狼 選

ご挨拶がつづきジョッキの泡が消え
消えた泡へ未練残してはならぬ
泡の中に包み自信のある姿態
真ぐ消える泡を小心たてたがり
しまい風呂シヤボンの泡も気を使い
一つずつ泡消えて行く鍋の蟹
蟹酌のビール泡までこぼさない
蟹の泡まだ諦めはせぬバケツ
倅せのひとつとき泡立て子を洗う
泡一つのこしてどたんばのあせり
泡を喰う事から世間知りはじめ
噴水の泡へネオンの灯が涼し
止り木に世相を怒る泡が飛ぶ
子に賭けた未来図いつか泡と消え
航跡の泡が溶けてく瀬戸の海
ライバルに一泡ふかす策を練る
日々の汗シヤボンの泡に勞られ
思い出の泡美しい色をもつ
ひと泡は何時かふかしてやるつもり
病む窓に雲がジョッキの泡に見え
闘士逝く嗚呼人生は泡に似て
泡立ちを杜氏見逃さぬ樽に在る
潜水夫泡と一緒に顔を出し
泡吹いて吹いて蟹達今日も無事
水の泡だった努力も悔いぬ母
大ジョッキ不快指数が泡に溶け
石鹼の泡が不倫の肌に浮く
一泡を吹かすつもり冬の汗

登美也

大柏

柳子

宵明

はじめ

茶人

枯梢

洋々

洋々

風

一進

芳子

重人

一路

洋々

洋々

可住

素身郎

可住

可住

可住

可住

泡沫の夢散にしばし吾を見る
沈みゆく石が未練を泡で見せ
とどめ刺すようにマスクの泡が止み

住

水泡と消えた昨日の距離を悔い
断絶を知らぬ親子の泡が飛ぶ
ブシュッとロマンシートへ泡が飛び
愛児に酸ホボンベの泡の音
泡消えたビール無言で向い合い
泡吹いて乾盃女もいける口
公害の泡へ漁場が病みつづけ
まだここに蟹が泡吹く浜が有る

地

天

洋々

津守柳伸さん
藤村メ女さん

から

本社事務所開きお祝いとして

金一封及び清酒

ご寄贈いただきました。

川柳塔社

初歩教室

題 替玉

本田恵二朗

気長―気短、長所―短所、のんき―せっかち、太―瘦、大胆―小心、表―裏、上戸―下戸、自力―他力、速い―おそい、老―若、明―暗、笑―涙、静―動、美―醜、偶然―突発、高―低、直―曲、寒―暖、関心―無関心、等の対照を考えてみることは川柳人の常識である。上記の対照語は、思い浮かぶままに書き並べたものだが、探せばいくらかでもある。それらの対照語を結んだり、からめ合ったりして生れた例句を並べてみるスペースが無いので各自が例句を探し出してみて欲しい。必ずや参考になるであろうし、あなたの作句策戦にプラスするにちがいない。

ではまた来月お会いしよう。ご健吟あれ。

替玉がばれて電話は腹かかえ

(替玉とバレた受話器が笑い合い)

影武者が多すぎ味方が迷ってる

(替玉が多過ぎ味方を迷わせる)

古都路

やすお

替玉と知らず幼児また眠り

(替玉と知らずに眠るもらい乳)

エネルギーの替玉探しままならず

(エネルギーの替玉探し競い合い)

本当の悪替玉で罪のがれ

(替玉と見せず凶人服似合い)

投票するとき替玉使われる

(替玉と投票箱は知っている)

代返事にらんで氏名呼びかえる

頭髮をかえて替玉と疑われ

(髪型をかえて替玉になりすまし)

替玉が本物よりもよく喋り

姉の替玉になった相手が今のハズ

(姉さんの替玉見合いで惚れこまれ)

替玉が判ったあとのさわぎよう

アクションの替玉飛ぶとこだけを撮り同

(飛ぶシーンは替玉さんに任せます)

どん底の私替玉はしくなる

(墮ちるだけ墮ちて替玉欲しくなり)

替玉がまんまと穴埋めしてくれる

替玉でゆく花道に揺れている

(替玉でゆく花道がゆれ止まず)

替玉のない人生を無事に生き

替玉がいて本物が欠伸する

(替玉にまかせて本物欠伸する)

替玉もノルマを上げる数に入れ

バッターの打ち気替玉してそらし

(玉替えて打者の打ち気を逆に突き)

忠広

同

みつる

同

天人

同

千子

同

山久

同

句味地

同

元江

同

胡頼子

寝屋川市民川柳大会

日時 昭和56年11月3日(祭)

午後一時開場・〆切二時

場所 寝屋川市立総合センター一階

(京阪寝屋川市駅下車・京阪バ

スターミナル③番乗場より総合

センター前下車すぐ)

席題 一題 当日発表

兼題 「電話帳」 片岡湖風選

「話題」 住田英比古選

「武器」 香川酔々選

「裏町」 森中恵美子選

「多忙」 橘高薫風選

(各題2句)

会費 五百円

講話 「発見していく生活」

川村好郎氏

■秀句には選者色紙呈、及び賞品を用意してあります。

主催 寝屋川市文化会

後援 川柳ねやがわ

替玉と替玉バツタリ舞台裏

(替玉と本物仲良く舞台裏)

替玉が本人よりも芸達者

(替玉の芸に本もの食われそう)

替玉を使って不渡り知らぬ顔

(替玉を使って不渡り空とほけ)

替玉が打つから釘も曲り出す

(替玉の玩具でやつと機嫌となり)

替玉のおもちやで機嫌とり直し

(替玉のバイトの方がよく動き)

替玉が間に合い過ぎて苦笑する

(替玉が間に合い過ぎて苦笑する)

替玉を持つほど大物にもなれず

ファンまいてスタントマンとは気付かれず

(ファンの目スタンドインだと見抜いてる)

替玉を任立てた男の高軒

(替玉を使って人気がさらわれる)

替玉の演技に人気さらわれる

(替玉の演技に人気さらわれる)

替玉がきっかけ売れ出したスター

(替玉がきっかけ売れる)

迫力に劣る替玉垢拔ける

(迫力に劣る替玉美男過ぎ)

替玉の意地 本物の座を狙い

替玉も保険かけられ値踏みされ

替玉を闇魔王見逃さず

(替玉だなど闇魔王に見抜かれる)

貞子

同

同

健司

同

同

柳五郎

同

同

保夫

同

同

英子

同

同

三男

同

同

公乃

同

同

同

同

勝美

同

同

(替玉の名が売れ過ぎて遂にバレ)

箱書来信替玉掴まされ

臨終へ会いたい肉親となっておく

(臨終へ会いたい肉親になってやり)

替玉にお株とられた悲喜劇

(替玉にお株とられた悲劇です)

矢面に立つ替玉にある哀歌

替玉のわたしを置いて旅したい

替玉がきかなくなつて塾はやり

替玉の方が舞台の板につき

父ちゃんに母の替玉つとまらず

替玉が大学の門開けてくれ

殺されたはずの盗人がまた盗み

にせものが本物らしい顔作り

替玉が本物以上だつてある

三文の替玉過保護で育てられ

社長という替玉女に戻れない

替玉のしやく板震える聖徳太子

(替玉の聖徳太子が震える)

替玉をたてて検拳の綱くぐり

親という立場替玉使えない

末法の受験 替玉大学生

恋人の替玉だつたらしてみたい

替玉の返事を先生聞きのがし

替玉の方が良かったのもめる

替玉も同じリズムで出番待ち

替玉でよし気が楽な酒の席

同

同

紀久子

同

同

美智子

同

同

ふみ

同

義美

同

芳水

同

芳枝

同

同

露杖

同

同

同

茂美

同

同

同

凡太郎

替玉の絵とも知らずに見せたがり

替玉に徹して生きることに決め

替玉を使って犯人おびき寄せ

そっくりさん裁判官も見破れず

落城を背に影武者の役おわる

替玉の社長が欲しい資金ぐり

替玉を使って関門くぐり抜け

親分の替玉としてムシヨ暮し

喪を秘して影武者陣頭指揮をとる

替玉の票に当落左右され

加害者が被害者だつたミステリー

替玉がバレて嘆叫の大胡座

替玉が自首大物は知らん顔

出所した替玉一枚箔がつき

替玉の演技にみごとたまざれる

替玉のいのちの中に棲む叫び

あなたが好き替玉なんて通じない

替玉で生きひたむきな血がもえる

替玉にも花道があり芸の幅

同

同

武太

同

同

同

瓢太

同

同

利美

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

川柳塔柳箋

一冊 二百円
送料 二百四十円

題 気移り 10月20日締切 (12月号発表)

宛先 岡山県倉敷市下津井一―九―三四

千七一一 本田恵二郎

大 萬 川 柳

「ほどほど」

入 選 発 表

選 者	川 村 好 郎
投 句 総 数	三 百 九 句
入 選	四 十 五 句

枚 方 山 久

ほどほどの幸せ今にも崩れそう

衰屋川 あいき

ほどほどを盲愛にする他人さま

和歌山 英 子

ほどほどの浮気だったら目をつむる

松原 重 人

ほどほどのとこで妥協をする打算

衰屋川 度

いつもほどほどに回ってる夫婦独楽

旭川 大 柏

ほどほどのとこで女は背を向ける

今 治 胡 頰 子

ほどほどにさしてはくれぬ核の傘

鳥 取 天 人

付き合いもほどほどにして続く仲

姫 路 葉 香

ほどほどにしとけと老人うとまれる

高 知 三 吉

ほどほどの防衛アメリカ承知せず

大 阪 好 一

ほどほどに妬かせる愛のテクニク

大 阪 ひろ子

ほどほどに遊ばせ手綱離さない

大 阪 美 恵

ほどほどにして野心のない証し

和 泉 洛 醉

ほどほどのところへ妻の顔がある

豊 橋 貴 弘

ほどほどにしとこう五十路の坂にいる

大 阪 凡 子

ほどほどに妻の手綱の伸び縮み

大 阪 凡 子

ほどほどの次元異なる国防費

岡 山 凡 太 郎

ほどほどに撒いたつもりがバーで会い

兵 庫 茂 樹

ほどほどに妬いて妬かれて古稀が来た

米 子 美 世

ほどほどにしたらと俺を叱る俺

和 泉 や す お

ほどほどに喋ってサミット切り上げる

守 口 右 近

ほどほどにさからい歯止めとなるも妻

大 阪 凡 子

ほどほどに妬くと妻の眸美しい

大 阪 凡 子

ほどほどに妬いてあなたは射程距離

大 阪 道 子

ほどほどに妬いてあなたは射程距離

大 阪 美 恵

ほどほどにして野心のない証し

大 阪 凡 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

大 阪 美 恵

大 阪 道 子

地ノ句

大阪 君子

ほどほどに翫んで母の座崩さない

天ノ句

岡山 いとよ

ほどほどにあしらわれてるのに男

選者吟

ほどほどに同情をして貸さぬなり

昭和五十六年度

ベストテン(八月現在)

一	君子	一五・五	大阪	一〇	道子	八・五	大阪	九・〇	鳥取
二	一二三	一五・五	堺	一一	満津子	八・五	大阪	九・〇	米子
三	花梢	一四・〇	富田林	一二	テルミ	八・五	交野	九・〇	「柱」三句以内
四	寿子	一三・〇	和歌山	一三	武雄	八・〇	和歌山	九・〇	「最」三句以内
五	千代	一一・五	米子	一四	文秋	八・〇	大阪	九・〇	縮切 十一月二十日
六	三吉	一一・〇	高知	一五	美幸	八・〇	大阪	九・〇	最終回
七	好一	一〇・〇	大阪						「最終」三句以内

以下略

投票先 堺市堀上緑町一―三―七 藤井二三万大萬川柳会

川柳塔社常任理事会(9月3日)

(出席者) 朶・好郎・薫風・水客・紫香・潮花・太茂津・鬼遊・史好・天笑・岳人・吸江・柳宏子・与呂志・酔々。

▽議事並に報告事項△

★川柳塔賞選考委員にて推薦作品三句を提出
出席常任理事の同意を得て、次のように決定した。

川柳塔賞(大阪) 西村美佐女氏
準賞(和歌山) 天満三千代氏

〃(今治) 矢野 佳雲氏

★路郎賞選考委員より提出された作品を、生々庵主幹推薦により、次のように決定した。

路郎賞

(新宮) 大矢 十郎氏

準賞

(倉敷) 野田素身郎氏
(青森) 工藤 甲吉氏

★56年度二賞発表句会並に同人総会は、10月4日午後1時より、なにわ会館にて開催する。

▼10月の常任理事会は1日(木)

(記録・酔々)

櫻谷寿馬氏より

事務所開きお祝いとして

金一封 拝受しました

川柳塔社

橋高薫風氏より

故御母堂お供養として

金一封

拝受いたしました

川柳塔社

本社 九月旬会

会場 金属会館
七日 午後六時

暑い夏も終り、会場には長袖や上衣姿もチラホラ。番傘の梶川雄次郎氏が初出席された。これまで何回かお見えになったような気がしていたが、真正正銘初めてとのこと。席題の選をお願いする。

おはなしは若本多久志氏。人と人との出会い、交わり、きずなが如何に深いものであるか。昭和26年、金沢から大阪へ出てくるとき貰った一枚の紹介状から中島生々庵主幹との出会いにつながり、また、その紹介状を頂いた先生は山川阿茶さんともつながってゆく。ふり返ってみると、いろんな人と不思議な縁でつながれているのである。

卯からヒナが孵るとき、親鳥が外からつつく時と、ヒナが中からつつく時が心ず一致しているという。これを「啐啄同時」というがそれほど親と子のきずなというのは深く不思議なものであると、最後に一つのエピソードを話された。亡き友人に隠し子があり、氏が自分の子と偽って告別式に列席するという話

だが、まさに短篇小説の趣きあり、ユーモアをまじえて今日のおはなしを締めくくられた。月間賞は若柳潮花氏が獲得。(史)

(受付) 与呂志・敏・重人
(進行) 柳宏子、記録・重人

出席 多久志・紫香・与呂志・勝美・雅風・鬼遊・滋雀・満津子・道子・眉水・悦郎・天笑・酔々・喜一郎・弥山入・水客・好子・潮花・瓢太・右近・吐来・憲祐・喜醉・史好・ひろ子・登志代・あいき・吸江・トメ子・綾珠・太茂津・幸・喜風・健司・善紫・千梢・千代三・川狂子・薫風・幸太郎・度・美幸・頂留子・桐下・規不風・文秋・栗・雀踊子・柳柚・柳伸・一二三・涼一・洋子・武太・雄次郎・鎮彦・柳宏子・三十四・洋敏・山久・射月芳・好郎・英壬子・寿子・岳人・ひで・喜美子・さよ子・萬的・弥生・糸葉・重人・敏・翠光・元紀・智子・凡九郎

席題「目先」

柴田 英壬子 選

目先ばかり見えて後をふりむかず
目先利くお蔭で定年延ばされる
サラ金のドアール目先をつまずかせ
倦怠期少々目先を変えたとて
あの言葉目先の事だけ言うてます
目先には触れず職人技を練る
目先変えたら百円硬貨落ちていた
嘘ついて目先の意地に勝つ女
目先から又飲み直す二三人

あいき 多久志 滋雀 度 山久 規不風 吐来 与呂志 柳宏子

目先き利く男友情すててゆく
父の仇目先を変えて北を向く
目先よく利き井池で財を為す
目先だけきかしておいた鼻葉
ホラ吹きにわりに目先のきく男
目先だけ見て二代目を選ぶ柄
目先の変わったアザインなので早くに売れ
夕暮れてやっと目先が見えはじめ
さすが船場丁稚も目先きいて
目先きかし心と違っている言葉
目先きく耳で株式きいて言葉
目先だけ変えたがやっぱり売れ残り
困ったことに目先だけ見る産油国
砂時計目先のプラン見失う
目先だけ信じる人の若白髪
目先移して見てはならないものに会い
目先効く男で気易く使われる
目先だけ繕っている他人です
楽になりました目先を変えてから
コマーシャル30秒の目先かえ
目先の見えぬ男に毒舌やえてくる
傷心の男は目先ばかり見る
目先のきくアンマでサーピスして呉れる
明日がある目先の不幸にこだわらず
迷いがあるから目先をかえたい
二枚舌いつか目先をかえてやる
避雷針目先のこととは考えぬ
目先きく次男が家を相続し
子沢山目先効くのが一人居る
目先きく嫁で無口になってくる
母の訃へもう目先など考えず

武太 岳人 千代三 喜一郎 萬的 雄次郎 涼一 吐来 川狂子 吸江 武太 洋子 雄次郎 幸 柳伸 吐来 三十四 登志代 幸 醉々 水客 美幸 萬的 好郎 鎮彦 柳宏子 重人 喜一郎 三十四 道子 道子

幸運を呼ぶ掛軸を変えて見る
一周忌までは目先にすぐ浮かぶ
目先利く女に石を一つ投げ

席題「絆」

梶川雄次郎 選

売られ行く小牛の絆泣いて捨て
盃と盃かわすい絆
絆ふり切つて都会で墜ちて行く
月々の仕送り母にする絆
袖触れて多生の縁という絆
父母の墓洗う絆が泣けてくる
水にも見え空気にも見える絆なり

涼一 英千子
右近 醉々 文 秋
あいき 射月芳
射月芳 滋雀
弥生

一分間の柳論

『空カロリー食』と言つがあるそう。ス
ナックや間食、インスタント食品などの食へ
過ぎて起る栄養不良のことだそうですね。

家庭の食卓では、長い間の経験で栄養のバ
ランスがとれているのですが、スナックなど
はカロリーはあつても、タンパク質やビタミ
ン、ミネラルも少ない。『空カロリー食』であ
るため、脚気やタンパク欠乏は考えられるが
さては貧血などを伴つた太り過ぎになるとい
つた私等では考えも及ばないような現象が起
るらしいですね。

川柳においても色々最近流行した思想が盛
んに云々される。いつまでも五七五を固く守
つていては、若い後継者も出て来ないし、ゆ

植村客遊子

うたかたの絆の中で抱く炎
絆もつ断つたつもりが夢で逢い
みそ汁に絆の端が浮いている
どん底で親子の絆太くなる
天を向く鼻が親子と知っている
さい果ての街から案内来る絆
根を土にしつかり張っている絆
コインロッカー絆がすかに生きていた
平手打ち男と女にある絆
憎むだけ憎んだ生母と会う絆
赤子の手しつかり握っている絆
悪友の絆が太い三次会

寿子 好郎 美幸
度 吐子 道子 射月芳
多久志 岳人 雀踊子
柳宏子 健司

くゆくは川柳が減びてしまつといつた事を申
されます。成る程そうですね。自由律やと
か言つて、五語で十語位で自分の意志を表現
出来たから良いのだとか、心象句とか私など
思ひもつかぬ事を言つて、これで前衛川柳と
か。

私共の小さな句会でもそういう理屈を言
つて感情的になつてしまつて結論づけられず
困つてしまふ。

私は時代遅れだとか頭が古いとか言われて
も、基本的な川柳の三要素の基に『空カロリ
ー食』で太り過ぎた人間にならないように勉
強して行きたいと思つた。

日中の絆バンダが芸をする
絆から抜け切れはせぬ鬼瓦
法律も愛の絆にある情け
ひよつとことおかめに絆あつてよし
幽冥の絆コソクゆれ動き
親と子の絆こんがらがらることもある
不運なる絆は戸籍にはのらぬ
過去帳の一字一字がもつ絆
その絆温める夜行の隅にいる
母親のしなびた乳房にある絆
愛されて欲しい絆が憎くなる
核家族絆は細くほそくなり
勘当はしたがその後を妻に聞き
警察で絆が痛いほど絡み
親と娘の絆を恋に引裂かれ
母親をこんな強くした絆
勝手な時だけ絆ふりかざし
どん底を甜めた二人にある絆
臍の緒が一番知っている絆
途中下車必ず会いにゆく絆

兼題「馴染み」

江口 度選

ふるさとの馴染みの味に和む舌
おひねりが飛んでお馴染み旅役者
ライバルの幼馴染と結ばれる
産院の馴染みになった子沢山
穴あいても馴染んだ鍋を捨てられず
立て込んでくる馴染みは立ってくれ
古くても馴染んだ馴染みは手離せず
要注意そんな男と顔馴染み
海の見える部屋は馴染みに空けてある

敏 醉々 武太 吐来 道子 涼一 洋子 悦郎 滋雀

駒染み客そろそろ無理も云うて来る
出世した幼な駒染みが逢いにくる
幸 あいき

お駒染みの顔へ自販機喋れない
お駒染みの女が亡母に似た仕草
柳宏子

顔駒染みという気易さに欺される
アリバイはちゃんと駒染みの客にある
涼一

店かえた日から駒染みは顔を見せ
番犬がもう吠えつかぬほど通い
洋敏

句ネタがお駒染みさんへ取って置く
こつちだけが駒染みになってるテレビ
弘生

チビた靴足に駒染みが捨て切れず
こたわりがあつて駒染みが邪魔になり
涼一

駒染みまで継母はあせらぬことに
駒染みなど無いが流転の流しギター
吐

顔駒染み立読みばかりしておれず
オーさんで通つていつもパーの隅
憲祐

お駒染みの帽子をふつて陛下さま
駒染みない犬に血統書の誇り
与呂志

駒染みにも負さぬ一線引いておく
人妻と駒染み甘い夢を見る
鎮彦

いつからか顔に駒染んできた仮面
おなじみはないが葬儀屋ようはやり
柳 柚

駒染みがやがや孤独の集りで
坊さんと駒染みにならぬ方がよい
あいき

お駒染みの聖徳太子首にされ
梯子酒駒染みとこで酔いつぶれ
千代三

心まで売らぬ距離まで駒染ませる
風船を割つて駒染まぬ一人っ子
多志

ひよつとこの七癖おかめ知りつくし
提灯を消して駒染みの客を入れ
道子

大社長幼駒染みを忘れない
潮花

兼題「釘」

笠原吸江選

うまそうに釘食べているとんとん屋
精一杯の反抗釘が曲ります
どんたく

釘打たず千年耐える文化財
豊かさに夫婦の釘もゆるみだし
萬的

古釘の一本に棲む父の貌
貧乏な釘はゆつくり打つてやる
道子

背広にも釘の錆つく独り者
組織社会釘運命を知らなすぎ
多志

さびて行く釘一本の価値の吾
釘さした話の方が知れ渡り
鬼遊

釘さしたつもりが舌を出されてた
私の板の釘を打つ他人
岳人

古釘にタオルが乾く飯場の灯
釘を打つ無冠の父に陽がきつい
千代三

釘ちよつといらうとプロは寄りつかず
折れ釘とみみずが交すラフター
千代三

みなし子に世間の釘が太すぎる
前衛文字さながら老母金釘流で叱つて来
柳 柚

ナス漬けの釘さからえぬ母の色
釘一本打つのにあれとれこれをとれ
柳 柚

本当の大工は釘を打ちしる
釘抜きへ錆びて曲つた意地がある
柳 柚

捨て石になつてゐるのか俺の釘
老眼鏡の釘はとつても素直でず
柳 柚

釘の痛みさけて掟を越えてゆく
釘隠し桃山文化の美に打たれ
柳 柚

殉教のてのひらに打つ五寸釘
タムになる廃墟の釘が目にささる
柳 柚

善人の板の釘なら軽く打つ
打たれても出る釘になる性であり
善人

素人の腕と知つてかすねる釘
釘をうつ音で家主がやつてくる
善人

叩かれることを承知の釘曲る
パチンコのベテラン今日の釘を知る
善人

母の打つ釘がしつかりきいてる
誤魔化せぬ釘一本が光り出す
善人

悲しみの多い釘ならすぐまがる
根性が悪いと釘も曲るなり
善人

生涯を其の運命と向き合つた釘
はやる日の釘あつち向きこつち向き
善人

息子には釘の打ちかた教えない
一本の釘を支える自負がある
善人

さりげなく妻の打つ釘かわせない
抜きたい釘がいつも心の隅に錆び
善人

ほとばしる若さを止める釘がない
釘にさえる機嫌よい日と悪い日と
善人

兼題「手」

阿萬萬的選

不器用な手が人並みの運命線
手作りの素朴さが抱く温情味
善人

目かくしへ母の手だけは言いあてる
よその子の手ばかりあがる参観日
善人

先代の手垢ついた見まませられ
手の内を少うし見ませたじろかせ
善人

口ポットが人間の手笑つてる
お地蔵を洗う折りを手に込めて
善人

乳母車の中に入れてる手内職
粧えと女は手から老けてゆく
善人

雀踊子
多志

軒太楼
武太

善一
善一

善紫
善紫

与呂志
与呂志

太茂津
太茂津

岳人
岳人

史好
史好

頂留子
頂留子

吐来
吐来

柳宏子
柳宏子

健司
健司

射月芳
射月芳

好郎
好郎

太茂津
太茂津

吸江
吸江

英子
英子

軒太楼
軒太楼

操子
操子

静馬
静馬

その手には乗らぬ上司が打つ先手
たくらみを握る男のふところ手
哺育器の両手は命握りしめ
合掌に人の情がしまえてくる

パンザイの両手はしやんと伸ばそつよ
ごつい手で人間国宝土を練り

両の手に友ありキャンプファイヤー燃ゆ
ボケットの手勝つ日を疑わず

考える余裕を与え手を貸さず

唄えない下戸は手拍子打つばかり

枕もと義手が静かに置いてある

どん底で生きる手足のあるを知る

ごつい手で小銭を入れた社会鍋

毛糸巻く調子出て来た夫婦の手

中流の暮らして妻の手が温い

明治生れ手抜きせぬのを誇りとす

手の内も見せて真剣だった恋

手を結ぶ建前さむい風に遇う

内職の手にも好みの彩がある

偽善者かもしれぬ男の手のぬくさ

手なすけとして今更野犬になれと云う

手ごころのいる程弱い妻でない

血の通うライバルと知る手を握り

大仏と握手している秋の詩

運のない手だと思ふ日暮れどき

平静をよそおう片手ひざに置く

長患いそつと手を見る夜の底

手を合わすたとわしが小さくなってくる

負けを意識している男の手の置場

雄次郎
千梢
射月芳
幸太郎

史太郎
敏

雄次郎
吸江

文秋
頂留子

涼一
吐来

右近
規不風

柳伸
吸江

柳伸
柳伸

潮好
史好

あいき
憲祐

吐来
岳人

健司
水客

美幸
萬的

メルヘンの星座に子の夢限りなし
星座から自由求めて流れ星
星座から緞帳を降ろしてみたくなる
どの星座へ帰って行ったかかぐや姫
男一匹左遷の果てで見る星座
獅子座から乙女座縁談急ピッチ
太平洋横断星座の中で寝るヨット
おもかけを星座に綴る片思い
スランプの時の星座がぼやけてる
星座では満点血統で行き詰り

夢多い少女の祈り聞く星座
またたいて星座は下界の和を願う
四ツ橋で見た星座には雲がない
旅疲れ露天風呂から見る星座
行儀よい星座を誇る星条旗

揺れているところを星座が受けとめる
さそり座を追うと男の明日がある
歳月は還らず星座はまたいて
ひとしきり星座が話の間をつなぎ

夏の夜の星座あの人置いてみる
星と星結んで神話生きている
親と子の別な運命を持つ星座
星座もう愛の誓いを聞き飽きる

ロマンチックな星座の女が抱く炎
好き同士星座なんかは気にしない
もひとりの私が住んでいる星座
さそり座の女でワイン酌きたがる
恋をして星座抜けたか流れ星

ホイジャヤ2号星座が赤い旗を振る
何が飛ぼうが星座狂わない

静馬
幸一
善紫
吐来

弘生
紫香

滋雀
太茂津

英王子
射月芳

頂留子
川狂子

吸江
憲祐

英王子
元紀

吸江
静馬

道馬
水客

翠光
千代三

寿子
あいき

射月芳
英子

憲祐
潮花
好郎

錦秋・北九州の旅

白杵の石仏／荒城の月の岡
城趾／北原白秋の柳川の舟
下り／菊池温泉の吟行句会

■スケジュール

昭和56年11月14日(土) 大阪南港(17時)

出発 15日8時別府港着—大分石仏—岡

城跡(昼食)—菊池温泉・望月旅館に宿

泊。16日菊池温泉9時出発—熊本市内観

光(水前寺公園)—11時50分柳川(舟下

り後御花にて昼食)—15時大宰府—福岡

空港18時—20時—大阪空港。

■集合

大阪南港関西汽船フエリ乗場
午後4時乗船待合室(時間厳守)

■会費

四万五千円

■定員30名(申込順)

窓口—梶・岳人
主催 川柳塔社

兼題「星座」

川村好郎選

老也柳城

■原稿用紙を使用。縮切毎月末着使まで十七字以内の句に、下三マスに雅号。

(整理・香川醉々)

勝山双葉川柳会

河野

君子報

ポーナスを出した日社長一人ぼち
ポーナス日機械の音もリズムミカル
毎年の事やがポーナスまた裸
ひやかしが恋に変わった夏の夜
帰り道だんだん主婦の顔になる
鍵っ子は母の帰りへ米を研ぐ
帰るまで気が休まらぬ子のバイト
爪の蔓天に届いた夢を見る
少女の夢が一つふくらむ花の種
つかめそなとこで手まねきしてる夢
ニュータウン夫婦で夢を見て歩き
空しさは楽しい夢が醒めるとき
見覚えののれんに落ちて着く里帰り
薄汚れたのれんが時代をさかのぼる

東大阪川柳同好会

齊藤三十四報

鎮彦
千代子
弥山人
秋

君と僕飾り気のない仲を飲み
耐えている笑顔と知らず火をそそぎ
嫁姑共に耐えている時代の差
重責に耐える覚悟はあると云う
仏背に今日も耐えている天邪鬼
耐えられる仕合せがある夫婦箸
潤いを肌で感じる村祭り
一輪の花で潤うむさい部屋
知りすぎた仲間が邪魔になつてくる
知る限りの知恵をしょってまだ迷い
やる気出し仕事に張りのあるを知り
耐えること知ってる姑と知らぬ嫁
それに耐えて円い輪崩れない
野仏の鼻のかけらに耐えを知る
飾ってる女に暗い過去があり

川柳化粧槽

植村客遊子報

常連は皆ママさんの情人(ひと)に見え
運勢と鬨う眉が太すぎて
てのひらに受けた雫は花の色
適当にやったりつもりが大目玉
灰色の世相へ百合の唯白し
十万石の顔して陽明門くぐる
管理職の名で矢面てに立たされる
行きすりの女和服がよく似合い
山々を越えて勇退の駅に着く
割箸を裂けば曲つた日の不運
練金衛杖たばかりに別添え
常連へマダム珍珠を別に添え
意地悪と云うてる人に頼り甲斐
はつきりとしなない態度に誤解され
今着いた荷物うれしい電話口

喜風 度 良教 三十四 慶三 雀踊子 白屯 湖風 美子 綾珠 雅風 右宏子 柳近 道子 悦郎

煙草喫う女の顔にある虚栄
富田林富柳会

板尾

岳人報

客遊子

歳老いて旅行が一番好きな母
北の宿星がのぞいた旅ひとり
旅すれば夫のことも皆わすれ
ローカルの旅は童話の中にある
奈良漬けにされて西瓜も売り出され
昏寝する姑にそつとかけ布団
西瓜の絵赤だけ雨で流れけり
ご詠歌が終ると西瓜冷えていた
臨終に季節外れの西瓜買つた
西風でも器量できまり直丸つき
涅槃仏の如おおらかに昏寝巻
コマシヤル音一段と昏寝醒め
昼寝している間にドラマ終つてた
まだ高値並ぶ西瓜を眺め過ぐ
叩かれて値も敲かれて西瓜売れ

駒つなぎ川柳会

里

小路報

視野が広がると硝子戸を開ける
限界を見えたら足場からおりる
限界をそろそろこえる唄が出る
限界を試す気力は買つてやる
限界を越えて風船破裂する
限界を忘れる月給日の屋台
限界の見えた男にあるかけり
限界を知つても蝶は舞いつづけ
結ばれるまでは限界まで守り
限界を知る寂しさが肩にある
限界がもつきた胸と腰の線
褒め過ぎる祝辞へ義理が手を叩く
極楽は消灯ラッパ聞いてから

為之助 美代 泰子 花梢 郁郎 澄子 柳太 岳人 美佐子 利重 美緒 美緒 美緒 力津子 浜ッ子 鎮彦 鎮彦 鎮彦 柳宏子 勝美 規不風 桐下 文秋 柳伸 儀一 雀踊子 千代三 恭太 善信

強いメンコを大事に土の子は育つ
限界に時には地位も名も捨てて
限界に挑戦ザイル確かめる
家計簿もそろそろローン考える

限界の日はさわやかにされるかな
昇天を諦め雲雀下りてくる
限界をようやく悟る色ざんげ

川柳しんぐう

川上

溪水報

風向きが悪い相談明日にする
波風を立てぬ梶を母がとり
子守唄風はやさしく児を包む

風見鶏にはなれぬ信心持って生き
突風に帽子飛ばして困りはて
母が居て毎日狂いのないリズム
単調な毎日平和なしかも
貧乏が毎日仕事を飽きさせず
毎日を土と寝起きの五十年
道草へ毎日息ぬく塾帰り

注射うつ医者もいつかは果てる人
人生をまだ捨てきれぬ注射針
一生を台なしにした針の跡
闘病の日々を刻んだ注射跡
一泊へ注射に走り髪も染め
慣れぬパン明治は妙な腹でいる
ならされてなれて朝食パンとなり
パン食になじめぬ朝の母の椅子
バター塗るパンを持つ手が母に似る
乾パンに耐えた焦土の日の記憶

むらくも川柳会
藤井 明報

鏡からふんわり朝の香が流れ
待たされるソファへふんわり落ちつかぬ

萬路 小潔

鬼遊 柳柚
射月芳 醉々

まさ子 勇太
大輪 薫子
澄孝 漢水
富子 三男

忠雄 すみれ
英子 孝一
正博 里美
十郎 テルミ
登紀夫 白光志

芳子 正朗

天の川語る夜空へ時を置く
困らんの幸がふんわり身を包む
夜の空星座へはすむ涼み台
また一つ夜空へ走る流れ星
初孫へ着せる祭りのゆかた縫う
駒下駄の鼻緒ゆかたによく似合い
新しい浴衣箆箭の底にねる
冷房にしたかと友が小半日
シャボン玉ふんわり垣根を越えて消え
冷房の車で冷えた苦い味
ふんわりと雲も旅する旅の空
夜の空赤い灯残し機は去りぬ
雨の音耳に湯舟のひとり言
合傘の雨に半分ぬれながら
夏休み日記だんだん余白出来
海が呼ぶ山も呼んでる夏休み

西村 早苗報

孝華 福子
とみ子 文子
みどり 秀子
ふみ子 はじめ
千里子 勇
明朗 鶏子
富子 百代
峰雪 幸子
雪子 龜甲
独仙 静代
千草 孝華
鉄花人 幸一
登美也 三和
流石 三石
秀子 巡歩
花子

第28回 八尾市文化祭

市民川柳大会

とき 昭和56年10月18日(日) 正午開場
ところ 八尾市商工会議所3階大ホール
近鉄大阪線八尾駅下車南300
m八尾市役所向い側

会費 一、〇〇〇円(呈作品集・鉢植花)
おはなし 川村 好郎氏

題及び選者(順不同)
席題 (席題) 当日発表久保田寿界選
「秋」 高橋 古啓選
「星」 柏原幻四郎選
「珈琲」 高杉 鬼遊選
「宴」 土田 欣之選
「これから」 中尾 藻介選
「島」 西尾 某選

締切 一題(兼席とも各題2句以内)
午後1時30分(各題2句)
投句先 〒581(八尾局私書箱第9号)
八尾市清水町一丁目1-6
八尾市立公民館内 川柳係
(投句締切10月5日受付分まで)
三、〇〇〇円
(希望者のみ当日受付)

懇親会 (希望者のみ当日受付)

主催 八尾市・八尾市教育委員会
八尾市立公民館
後援 八尾菜の花句会

後援

後援

後援

大雨におびえる低地に住む弱身
いろいろな薬を趣味の様に飲め
伏線をしない女の身繕う
たよりに男が齒の浮くような世辞
しじみ舟南画になって雨けむる
好きですと娘が云う孫のような娘が

川柳大坂

西岡 洛酔報

いたずらな風の謀叛におどらされ
信頼は黙って心へ結び付き
悪人の身体は不死身の岩のごと
死にほくろある日の妻にひやかされ
夏来れば秋早く来い老いの愚痴
かけ落ちの女のちを張っている
四面楚歌夏の陽照りもすさまじき
表情を変えぬ男の肚つもり
泣き笑い廻る夫婦の走馬灯
送るのも辛いが残る身も辛い
天国へ行く切符を売る窓口はどこ
片道の切符を男はいちう切符
奈良行の大仏さんに会う切符
口笛も大も返事をせぬ孤独
神主の笛は幸せ持ってくる
口笛に見上げるノラの澄んだ瞳よ
人間の歴史いろいろ謎に包まれる
兄弟も金の話は他人なり
兄弟のどこかで底う血が流れ

川柳塔まつえ

恒松 叮紅報

絵ハガキは美人ぞろいの京みやげ
モナリザの微笑が頼な日のうつつん
影絵未だまぶたに残る原爆忌
絵馬堂で俵せうすい女みる

寿美子 多賀子 雄々 緑之助 早苗 天樹 ひろ子 秀峰 重人 洛酔 本蔭棒 与呂志 三十四 君枝 喜醉 六龍子 比呂志 醉々 弘子 道子 醉花 天平 笑風

鍵っ子の書く絵にみどり色が無い
クルクルまわす絵日傘に罫がある
一流の商社にひびく円相場
一流の歌手が地方を甘く見ると
だまし舟を折り手応えを待ってみる
手応えがあったと知った陳情団
ポケットベル無情酒席を中座させ
急用で行くに化粧の長い妻
急用をトイレの中で思い出し
急用に救われいやな席を退く
急用をなおせかされる蟬しくぐれ

わかあゆ川柳会 小砂

日本の内閣みんな舌足らず
舌足らず同士火鉢の灰をませ
割れてこそお役に立つと割箸が
熱いもの外で冷して冷蔵庫
冷蔵庫去年のご馳走出して食べ
割箸に温泉小唄もそえてあり
民宿の竹の割箸持ちかえり
割箸もお値段らしいものがつき
割箸のボールで泳ぐ鯉のぼり
割箸の袋が語る旅の味
舌足らず残りは手話で追いつめる
冷蔵庫無くても暮らせる距離に住む
舌足らず核は右往左往され
笑わせて火の手を消した舌足らず

虹川柳倶楽部

新岡回天子報

居すまひを正して語る義理人情
パン食べて米価値上げに抵抗し
床柱背に裸の夏祭
賭博した課長が辞退の決をと

早苗 鶴丸 舞吉 登美也 孤呂二 与根一 通児 巡歩 愚童 白汀報 叮紅 酔夢 タケノ 秀穂 敏明 ふみ 鈴江 恒星 輝栄 歳栄 美栄 清夢 はるみ 清泉 白汀

煙草吸う閑さえないと云うて吸い
金で片付ける遮断機下りている
ペーロンの離子に蟹も拍子とり
夏草がのぞき見している倉の窓
まん中へ寝せてもらって里で愚痴
言わ猿で定年迎えた平社員
荒れ狂う風には風の道があり
生ビール娘もくんで景気よし

川柳ささやま

河原みのる報

暑くとも線をくすさぬ舞扇
甲子園暑さを知らぬ背番号
自動ドア一枚暑い夏を分け
老農に笑顔が還る暑い夏
まだ化ける根性がある狐の眼
善人に化ける涙は許される
今宵亦どの術で化かそ眉をかく
三面鏡上手に化けて笑ってみる
責任者たれかと問われて青くなり
責任のない口笛を吹く他人
責任者残って下された後がある
一流の医者で下した手術台
一流も腕も一流と認められ
人柄も腕も一流と認められ
責任の方はばやけている養子

南大阪川柳会

中川 滋雀報

もう半ばまだ半ばとも四十路
青春の半ばを軍靴で消えた悔い
学半ばパイトの甘い汗に馴れる
ろなめからながの肩を叩かれる
交又点なめに渡る勝利感

一竿 盛雄 善美 久仁於 柳治 虹汀 回天子 百合子 栄樹雄 ゆきお 宗珠 ひか平 文平 みのる 越山 春峰 ゆう也 美一 美智子 素水 八陣 可住 楓楽 滋雀 柳宏子 信治 好郎 度

この悩みもちこたえるには小さい胸

玉水

形水報

もうかるとなれば商社も餓餓い

博泉

デモ隊のプラカードにもあるゆとり

千夢

キラキラと光る瞳へ暗れ間見る

聖地

苦しんだ時が暗れ間に見えてくる

幸坊

プラカード肩に疲れたまま家路

光男

低迷が続きスナックで唄っている暗れ間

重成

来客も母も疲れた夏祭り

登一

青葉キラキラ昼休みの暗れ間

一扇

プラカードへ退け時の足無関心

形水

あこがれはだんじりに乗る勇み肌

入仙

ラブホテル誘うプラカード無表情

好郎

川柳やがわ

博泉報

自分のことは祈らぬ母で達者です

柳宏子

ポスターに遊び給えと入道雲

英壬子

なすの色悪い出はみな美しき

恭太

キャンパスにへそを入れたら動く裸婦

琴音

神はまだ地球のへそに住んでいる

一念

腐れ練車咬んで離さない

一途

お手洗いでしみじみわが家だと思ひ

満津子

女とは哀しきものよ過齡期

弘生

ええように転んで祈りがきいてきた

博泉

空回りする歯車の不幸

鶴声

どん底の自分が自分らしくみえ

山久

オフィスの中からあこがれる入道雲

成美

歯車が合わぬ夫婦で趣味に生き

好子

ラッシュアワー今日も歯車まわり出し

敏

天も地も合掌の中に有る祈り

花世

入道雲に小さな欠伸してるほく

亜鈍

歯車が噛み合わぬまま出る家裁

右近

入道雲職を求める目に高い

天下取るへそが後釜狙つてる

絵日記の入道雲に顔がある

米値上げもう歯車が狂い出し

槍投げの入道雲の胸めがけ

母はベッドで白い奈落を覗いてる

葉の花句会

氣にいらぬ靴をはいたら運が逃げ

遠い遠いこぼんちやんだった三輪車

村長に同じ苗字の敵がいる

古い絵の記憶が一つ消せません

幸運な蛙がつかむ柳の葉

たけのこはだまって隣へ越してゆき

村会は休み村長釣りにゆく

北浜が裸で帰す運だめし

母の記憶を美化させてゆく少しずつ

この一線越えると莫迦になる私

他所者が来てから村長忙しい

申かつとジャン子チエが夕焼ける

道草が好きか今だに來ない運

刑務所の扉をひらりと越える蝶

くじ運の弱いところが似た夫婦

村長は案外若い長寿村

線香が匂い下寺夕暮れる

子を守る終着駅のないレール

峠越えると分教場の屋根が見え

村長さんの孫という縁談もちこまれ

川柳わかやま

ふり向けは私ひとりがラッパ吹く

霊場も避暑地にかわるサングラス

猫三匹籠に入れてのお買物

女

晴風

三千子

光夫

酔々

薫風

鬼遊報

健司

与呂志

射月芳

糸葉

酔々

昭子

度

雀踊子

好子

幸生

柳宏子

美幸

頂留子

鬼遊

康恵

凡九郎

柳伸

悦郎

シマ子

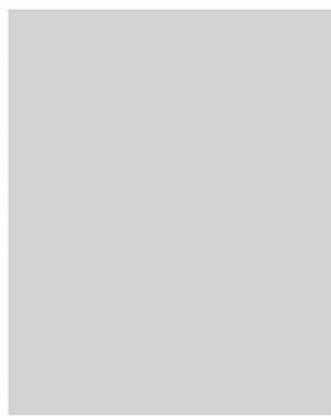
栗

三男報

雀踊子

稚代

きみ



先生の頭の外エを打つノート

千羽鶴の子言へいのちなど売らぬ

削られた山膚何かを予言する

斜めから予言を斬って想い断つ

あきれれる場合ではない蟻の力持ち

降る星に恋の子言を問うて見る

あやふやな予言に迷うた曲り角

父の吹くラッパはまだ元気です

栄光の果に鳴らないラッパ抱く

神秘性持たず予言の道具立て

八月の空へ鎖めのラッパ鳴る

いざという時のラッパは男吹く

青春っていういなピールのラッパ飲み

あの年でまだまだお盛んとはあきれ

君でさえあきれれることがあるんかい

夜光虫逢いたい人に逢う予言

あきれるといつつほころぶ母の顔

太茂津

幸

正博

寿子

千寿子

和子

光代

紀美女

三男

白光子

善太

佐代子

メ女

天彦

凡九郎

酔々

川柳高知

川竹 松風報

雨もよし遠い慕情が寝つかせず
生徒にも女が匂う朝の道
一円のコスがひびく手内職
貸衣裳ぬいで身内は飲み直し
孫の筆幸せそうな海に塗る
突然の別離体の血が凍る
師と言われ遠い記憶に辿りつき
自衛隊他国の指示で太くなる
百薬の長とは嬉し度を過し
あの時の雨が買わせた傘であり
病室の窓あけ寺の水魚聞く
入れ知恵もあつて非行の言葉尻
悪友を救う嘘なら言つてやる

川柳たけはら 森井 善居報
八・六の祈りへ聞こえてくる軍靴
気がつけば口先だけで子を叱り
来年は受験不安な夏休み
二級合格ますますそろばん好きになり
自然界だませばあとでつけがくる
凡人の愚痴チヨキバアに惑わされ
ふるさとの枕に不眠症はない
アリバイを古い日記がしゃべりだす
沈黙は金なり朝の陽が昇る
それなりの暮らしビールがうまいなり
ここだけは汚らぬ夫唱婦隨の地
梅雨晴れに芽の我が城の赤瓦
ハンカチは何色でもよし手を貸そう
計算をすれば達磨にしかなれぬ
下を見て人生うなすく事多し
童画の中の語り部が好き昼の酒
花言葉信じて今宵妻となる

菊野 つぎお 三吉 宣長 秀子 竹萌 広風 朱坊 弘生 登舟 一三三 松風 静水 笑子 小三愛 小四紀 小四仁昭 房幸子 蘭幸 節夫 鈍舟 比呂子 不朽 菁居 秀水 一路 かつ子 かつこ 里香

浄土への日は花嫁の思い抱く
石乾く暇なし北の海きびし
時間とのたたかひルービックキューブ
紫陽花に女の生きさまふと匂い
京都塔の会 松川 杜的報
六年もかかった地下鉄シユウと着き
ひとときのしあわせ浅清けの茄子の色
ついて来た小犬に傘を着せてやり
野沢菜や坂かぬひと酌む酒で
水無月をもうすだいでる虫の居て
夏布団をか低うして母病める
日陰の風サラリと涼しい絹上布
昼寝から醒めて花緒のゆるい下駄
成功のかけに欠かせぬ裏話
うちの人嫌いでしたと裏話
紅一つ塗らぬ女の裏話
この位手頃二人きりの城
音痴にも楽器にあわず歌があり
にた川柳会 西村 早苗報
残暑まだ続きますよと油蟬
若い気のバランス鏡が教えかけ
議員の子やっぱり教師目をつむり
これ以上話す余地なし暇乞い
土曜市値切り上手な妻をみる
孫の旅軽い草履のプレゼント
姑の言分もある討論会
ハンドルを握れば七十とは見えす
アドバリン雲の自由を始めている
人を見る目玉が変る袖の下
食って飲むのがロボットとの違い

シゲヨ 貞子 小四繁 敬子 求芽 美穂 紫香 杜的 芳子 孝江 水客 弘之 飛鳥 潮花 白溪子 花代子 宗悟 独仙 孝華 みのる 登美也 亀甲 千草 孝 巡歩 多賀子 栄 幸一

見送りのバスは追わないことにする
満ち足りた年月病魔の嫉妬かも
秀才は女難の味も知らず老い
防波堤崩れ女が脱走く
告白へこころ痛めるほど妬かず
ワンマンの頼杖でいる気味悪さ
石段に立たせて向けるカメラアイ
いつか逢う瞳に赤トシホが群れる
岸和田川柳会 植山 武助報
船旅のビールがうまい朝の風
気安さが裏からお茶を誘われる
今だから笑って話せる裏話
裏金が派手に動いた政治劇
成功のかけに哀しい裏話
裏街でこんなきれいな花に会い
おいでおいで掃路を待伏せするビール
角の立つ話團扇で円くうけ
呼び声がしそう四十九日の仏間
大阪に来て根性をもらつてき
ちらほらと上衣をつけて立立ちぬ
開拓の歴史の跡をバスが追い
顔洗う暇もなかった慌てよう
雨垂れの石突き出来苔の花
童心に私もかえる人に逢い
親の顔知らぬ小鳥にしたらわれる
コマージュルもんでゴキブリ暴れ出し
四十の顔責任をもたされる
いつ来ても大仏の顔に嘘がない
見ぬふりをしている顔がはてり出す
ケラケラと笑って女肥えている
母さんのファイイト新聞記事になる

嘉寿子 花子 寿美子 雄々 弘朗 緑之助 早苗 武助報 白光子 加代子 さよ子 甘平 ひで 浪速子 義秀 武助 佳生 世界人 辰雄 希久志 民治郎 せつ子 富志子 善吉 春栄 加仙 操子 射月芳 幸代

● 募 集 ●

十二月号発表 (10月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 栞選
 水煙抄(10句)正本水客選
 愛染帖(3句)橘高 薫風選
 課題吟(各題5句以内)
 「限度」 白岩文衛選
 「景品」 伏見茂美選
 「肩」 河合茂雄選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

一月号発表 (11月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 栞選
 水煙抄(10句)正本水客選
 愛染帖(3句)橘高 薫風選
 課題吟(各題5句以内)
 「素直」 江口度選
 「エプロン」 小笠原青女選
 「巢」 大塚勇選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。★用紙はなるべく柳箋をご利用ください。

10月の常任理事会は1日5時から

〒545

大阪市阿倍野区三丁目二一〇一六
 ウエムラ第2ビル202号室
 編集兼 発行人 中島蓬太郎
 印刷所 藤原童心社
 発行所 川柳塔社
 電話 (六六)六一六九一四番
 振替口座大阪・三三三八八番

定価 五百円(送料45円)
 半年分 三千二百円(送料共)
 一年分 六千三百円(送料共)
 昭和五十六年九月二十五日印刷
 昭和五十六年十月一日発行

本社11月句会

日時 十一月六日(金) 午後六時
 会場 金属会館
 南区鰻谷東之町10番地
 地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ
 電話 271・3935番
 おはなし
 「灰」
 「通る」
 「無限」
 「時間」
 上田翠光
 宮西弥生選
 金井文秋選
 若柳潮花選
 大坂形水選
 各題三句以内厳守
 席題 二題 当日発表
 会費 三百円

★投句は句箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川柳塔社

12月の兼題 「音い」 「指断」
 「近」

本社12月句会は7日

お買物は
 4都を結ぶ
 大丸へ!



大阪・東京
 大丸
 京都・神戸

編集後記

▼新事務所と会計室は円滑に事が運ばれている。新生川柳塔は軌道に乗ったわけである。

▼九月三日の常任理事会に事務所開きの乾杯をした。二賞選衡のあととて殊の外ビールがおいしかった。

▼川柳塔賞の決定には、選衡委員の顔ぶれから推して

肉体疲労時のVB₁₂補給に—— アリナミンA

アリナミンA25の効能—肉体疲労時・病中病後・妊娠授乳期のビタミンB₁₂補給、神経痛・腰痛・筋肉痛・肩こりの緩和、脚気、空説明書をよく読んで正しくお使いください。☆くわしくは医師、薬剤師、薬局、薬店にご相談ください。

武田薬品工業株式会社 〒541 大阪市東区道修町2-27



も分るが、大いにエキサイトした。川柳塔賞の受賞者美佐女さんは、亡き不二田一三夫さんが名付け親であった。今年も美佐女さん以外は総て地方の作家で占められた。十月四日なわ会館でお会いしましょう。

▼去年の今日、九月八日は一三夫さん宅へ常任理事会有志の見舞金と十月号原稿を届け本社句会へ取って返した日である。思えば慌ただしい公私に亘る変転にもまた一年だった。「蕉」

▼みの虫のなんば用うても壁だった。豆秋

▼ミノムシガの幼虫。木の葉など細糸でつづつた丈夫な袋の中に棲む。枕草子の中で、清少納言は、「風の音を聞き知りて、八月ばかりになれば、父又父よとはかなげに鳴く、いみじうあはれなり」と書いている。

▼鬼が自分の子をうとましく思つて、きたない衣につつんで、秋風が吹く頃戻つてくると捨子して逃げる。子はだまされたと知らず秋風が吹く頃になると、ち

ちよ、ちちよとさびしく鳴いている。

▼糞虫は別に鳴くわけはないのだが、カネタキと間違えたものだろう。

▼でも鬼との連想は、おもしろい。これからも川柳作品に多く現われてくるだろう。次は、一茶の句。寝ぐらしや虫も寝着てかせぐ夜に

▼私は日記をつけている。博文館新社発行の横線三年運用日記で、三冊目の第三年目に当るので、この年末が来れば九年書いたことになる。五十歳を過ぎて何故日記を書きだしたのか、確かな動機は思いつけないのだが、無為に過ぎる人生の虚しさに対する反省もあつたようであり、それよりも忘れっぽい脳細胞を補うための方が大きかつたように覚える。昨日のこととも忘れるようでは、万一、盲憲に

糾された時に、どう答弁の仕様もなく、彼等の筋書き通りにされる怖れが、毎夜私に日記を書かせているようでもある。オーバーのよ



ご進物に重宝な 近鉄の商品券

★500円から50,000円まで各種ございます
先様にお望みの品をお選びいただける
手軽で便利なご贈答品です。ご進物には
近鉄の商品券をどうぞ

近鉄百貨店

アパル店 06-624-1111 上本町店 06-775-1231 奈良店 0742-33-1111

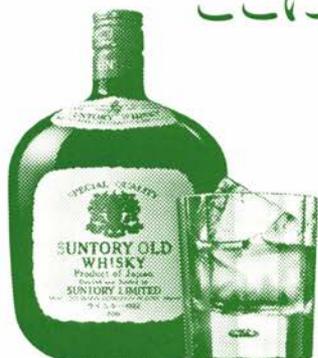
うだが真剣なのである。無実の罪状で一生を終る人もある現実を、他山の石として無関心で見過ごせないものである。

▼ホートピア81が終った。心配された大事故もなく入場者も予想以上で黒字三十億円とか。

▼ばくも、こんどは人並みに、いそいそと見物に出かけた。六月のウイークデーで比較的すいていたが、それでも長い行列は敬遠し、すぐ入るのバピリオンばかり、のんびり見て回った。ハンダは思ったより大きな動物だった。コンパニオンのビチビチギョル達を眺めるだけで結構、眼の保養になった。

▼やはり、お祭りなんではないのは人の尻馬に乗って騒ぐのでない面白くない。大阪の万国博の時は、世の尻馬に乗るを潔きよしとせず、妙につっぱった姿勢で「万博拒否」を通したが、いま思うと、あの一途な気が持が懐しい。

不思議なる時の技と
精妙なる手の技かくみしあい
ここにひとつの芸を見せる。



—陶然たる名人芸—
サントリーオールド

標準的な小売価格2,770円 製造・販売 サントリー株式会社

美の殿堂 大和文華館

平城京をめぐる山々を一望の
静かな環境にある大和文華館
は 日本建築の特色に近代美
を生かした美術の殿堂です
収蔵品も日本・中国を中心に
国宝・重要文化財を含む 有
数のコレクションです
観覧時間…10時～17時

▶近鉄奈良線 学園前駅すぐ

近鉄

